

〔喪車背
後云々〕
死人に藥
を飲ませ
ても何の
効がある
ものか
罵るの語
なり。

碧巖錄 第七卷

五七

斬ることを消せず。喪車背後に藥袋を懸く。長安城裏、閑遊に任す。〔恁麼に快活なることを得たり。恁麼に自在なることを得たり。手に信せて草を拈じ來る。汝をして恁麼にし去らしめずんばあるべからず。〕草鞋頭に戴いて、人の會する無し、也た一箇半箇有り。別には一家風。明頭も也た合し、暗頭も也た合す。歸つて家山に到り、即便ち休す。〔脚跟下好し三十棒を與ふるに。且く道へ、過什麼の處にか在る。只だ汝風無きに浪を起すが爲めなり。彼此放下す只だ恐らくは不恁麼ならんことを、恁麼ならば也太奇。〕

〔評〕公案圓にし來つて、趙州に問ふ。慶藏主道く、人の案に結するが如くに相似たり。八棒は是れ八棒、十三は是れ十三、已に斷り了れりと。却つて拈じ來つて趙州に問ふ、州は是れ他の屋裏の人、南泉の意旨を會す、他は是れ透徹底の人、聖着、禪着、便ち轉ず、

本分の作家の眼腦を具す、纒かに擧着するを聞いて、別起して便ち行く。雪竇道く、長安城裏、閑遊に任すと、遍逗少なからず。古人道く、長安樂しと雖も、是れ久居するにあらず。又曰く、長安甚だ鬧し、我が國晏然と。也た須らく是れ機宜を識り、休咎を別ちて、始めて得べし。草鞋頭に戴く、人の會する無し、草鞋を戴く處、這の些子、許多の事無しと雖ども、所以に道ふ、唯だ我れ能く知り、唯だ我れ能く證すと。方に南泉、趙州、雪竇、同得同用の處を見得せん。且く道へ、而今作麼生か會せん、歸つて家山に到つて、即便ち休す、什麼の處か是れ家山。他若し會せずんば、必らず恁麼に道はず、他既に會せば、且く道へ、家山什麼の處にか在る。便ち打つ。

第六十四則 趙州草鞋

五七九

第六十五則 外道問佛

垂示曰。無相而形。充十虛而方廣。無心而應。徧刹海而不煩。舉一明三。目機銖兩。直得棒如雨點。喝似雷奔。也未當得向上人行履在。且道。作麼生是向上人事。試舉。

讀方 垂示に曰く。無相にして形はれ、十虚に充ちて方廣たり、無心にして應ず、刹海に徧うして煩からず。舉一明三、目機銖兩、直に得たり棒雨點の如く、喝雷奔に似るも、也た未だ向上の人の行履に當得せざること有り。且く道へ、作麼生か是れ向上の人の事。試みに舉せん。

舉。外道問佛、不問有言、不問無言。雖然如是人也、

〔十虚〕十方虚空の略なり。〔刹海〕刹とは世界のこと、刹海とは世界無量無邊の多きことをなす。

大海に多くの島があるに譬へて云ふ

有_二些子_一香氣。双劍。世尊良久。莫謗世尊。其聲如雷。佛者立者、皆動他不得。

外道讚嘆曰。世尊大慈大悲、開我迷雲、令我得入。伶惻漢、一撥便轉。盤裏明珠。外道去後、阿難問佛、外

道有何所證、而言得入。不妨令人疑着也。要大家知。銅鑪着生鐵。佛曰。如世良馬見鞭影而行。且道喚什麼作鞭影。打拂子。棒頭有眼。明如日。要識眞金火裏看。拾得口喫飯。

〔然かも〕是の云々一本には、然も是れ屋裏の人ならず

讀方 舉す。外道佛に問ふ、有言を問はず、無言を問はず。(然も是の如くなりと雖ども、屋裏の人也。た些子の香氣有り。双劍空に倚りて飛ぶ。頼に是れ問はず。)世尊良久。(世尊を謗すること莫れ。其の聲雷の如し。坐者立者、皆他を動すること得ず。)外道讚嘆して曰

分兮、迷雲開。放一線道。許汝有箇轉。身處爭奈只是箇外道。慈門何處、

生塵埃。徧界不曾藏。退後。因思良馬窺鞭影。我有杖

子、不消汝與我。且道、什麼處。千里追風、喚得回。騎佛

是鞭處、什麼處。是良馬處。喚得回、鳴指三下。前不構村、後

放過即不可便打。錯。杖杖子、向什麼處去。雪

寶雷聲甚大。雨點全無。

讀方 機輪會て未だ轉せず、(這裏に在り。果然として一絲毫を動せ

ず。轉すれば必ず兩頭に走る。(有に落ちざれば必らず無に落つ。

東せざれば則ち西す。左眼半斤、右眼八兩。)明鏡忽ち臺に臨む、

(還つて釋迦老子を見るや。一撥すれば便ち轉ず。破れり破れり、敗

れり敗れり。當下に妍醜を分つ。(盡大地是れ箇の解脫門。好し三十

〔機輪〕人
有の本心
木性が縁
に隨ひて
自由に在
るにして無
碍に活動

なること
なり。

〔因て思
ふ〕一本
に因て思
ふは、因
り外其の
筋に違は
ぬや、違
心をつけ
て工夫す
ることを
憶ふは心
に記すこ
とあり、こ
と起すこ
とひたり

棒を與ふるに。還つて釋迦老子を見るや。妍醜分かる、迷雲開く、
一線道を放つ。汝に許す箇の轉身の處有ることを。争何せん只だ是
れ箇の外道なることを。慈門何れの處にか、塵埃を生ぜん。(徧界會
て藏さず。退後退後。達磨來れり。)因つて思ふ、良馬鞭影を窺ふこ
とを、(我れに拄杖子有り、汝が我れに與ふることを消せず。且く道
へ、什麼の處か是れ鞭影の處、什麼の處か是れ良馬の處。)千里追
風、喚び得て回す。(佛殿に騎つて三門を出で去る。身を轉せば即ち
錯る。放過せば即ち不可。便ち打つ。)喚び得て回らば、指を鳴らす
こと三下せん。(前は村に構らず、後は店に迭らす。拄杖子を拗折し
て、什麼の處にか向ひ去る。雪寶雷聲甚だ大にして、雨點全く無
し。)

【譯】機輪會て未だ轉せず、轉すれば必ず兩頭に走る。機は乃ち千

茲にては
憶ふの方
可なり
〔古人道〕
一本に雪
寶道とあ
り。龍子
〔龍子〕
を生ず
漢文に
龍生龍
とあり
故に龍
の龍子
讀むと
あり

碧巖錄 第七卷

聖の靈機、輪は是れ從本已來諸人の命脈なり。見ずや古人道く、千聖の靈機、親しみ易からず、龍、龍子を生ず、因循すること莫れ、趙州奪ひ得たり、連城の壁、秦王相如、總て身を喪すと。外道却つて是れ把得住し、作得主して、未だ嘗て動着せず。何が故ぞ他道ふ有言を問はず、無言を問はずと、豈に是れ全機の處にあらずや。世尊風を見て帆を使ひ、病に應じて藥を與ふることを會す、所以に良久、全機提起す。外道全體會し去つて、機輪便ち阿轆々地に轉ず。亦轉じて有に向はず、亦轉じて無に向はず、得失に落ちず、凡聖に拘はらず、二邊一時に坐斷す。世尊纒かに良久、他便ち禮拜す。如今の人、多く無に落在す、然らずんば有に落在す、只管に有無の處に在りて、兩頭に走る。雪竇道く、明鏡忽ち臺に臨む、當下に妍醜を分つ。這箇會て動着せず、只だ箇の良久を消して、明鏡の臺に

臨むが如くに相似たり、萬象其の形質を逃るゝこと能はず。外道曰く、世尊大慈大悲、我が迷雲を開き、我をして得入せしむ。且く道へ、是れ什麼の處か是れ外道の入處。這裏に到りて、須らく是れ箇々自ら參じ、自ら究して、自ら悟り自ら會して、始めて得べし。便ち一切處に於いて、行住坐臥、高低を問はず、一時に現成せん。更に一絲毫を移易せず、纒かに計較を作して、一絲毫の道理有らば、即ち人を礙塞殺し、更に入作の分無けん。後面に世尊大慈大悲、我が迷雲を開いて、我をして得入せしむることを頌して、當下に忽然として妍醜を分つ。妍醜分かれ、迷雲開く、慈門何れの處にか、塵埃を生ぜん。盡大地是れ世尊、大慈大悲の門戸なり、汝若し透得せば、一捏を消せず、此れ亦是れ放開底の門戸あり。見ずや世尊三七日の中に於いて、是の如きの事を思惟す、我れ寧ろ說法せずして、

疾かに涅槃に入らんと。因つて思ふ、良馬の鞭を窺ふことを、千里追風、喚び得て回す。追風の馬、鞭影を見て、便ち千里を過り、回さしむれば即ち回る。雪竇の意、他を賞して道ふ。若し俊流を得ば方さに一撥すれば便ち轉じ、一喚すれば便ち回るべし。若し蹊び得て回らば、便ち指を鳴すること三下せんと。且く道へ、是れ點破か、是れ撒沙か。

第六十六則 巖頭黃巢收劍

垂示曰、當機觀面、提陷虎之機。正按傍提、布擒賊之略。明合暗合、雙放雙收、解弄死蛇、還他作者。

〔讀方〕

垂示に曰く。當機觀面、陷虎の機を提げ。正按傍提、擒賊の

〔正按傍

提正
とは正
かとは
とら向
ては行
は其反
で横合
むら突
ととと

略を布く。明合暗合、雙放雙收。死蛇を弄すること、を解するは、他の作者に還す。

舉。巖頭問僧、什麼處來。未開口時、納敗缺了也。穿僧曰、西京來。果然。一頭曰、黃巢過後、還收得劍麼。平生不曾做草賊。不懼。僧曰、收得。敗也。未識轉如麻。巖頭引頸、近前曰、因。也。須識機宜、始得。僧曰、師頭落也。只見錐頭利、不見鑿。巖頭呵々大笑。盡天下衲僧、不奈何。欺殺天。僧後到雪峰。依前顯這僧、往々十峰問、什麼處來。不可不說來。僧曰、巖頭來。果然。納。峰曰、有何言句。舉得不。僧舉前

話。便好。雪峰打三十棒趕出。雖然斬釘截鐵、因甚也未到折在。且未是本分、何故朝打三千、暮打八百。若不

〔巖頭〕雪
峯の法兄
に宣弟
德山全
禪師の
禪師の
子なり
鄂州の
に住せ
れしを
て巖頭
云ふ。曹
〔黃巢〕
州に賣
と稱し
鹽を賣
入あり
性任俠

是也。同參、爭辨、端的。雖是然如、是且道、雪峰巖頭、落在什麼處。
讀方 舉す。巖頭僧に問ふ、什麼の處より來る。(未だ口を開かざる時、敗缺を納れ了れり、鬪體を穿過す。來處を知らんと要するとも、也た難からず。)僧曰く、西京より來る。(果然。一箇の小賊。)頭曰く、黃巢過ぎて後、還つて劍を收得するや。(平生曾て草賊と做らず。頭の落つることを懼れず、便ち恁麼に問ふ。好大膽。)僧曰く、收得す。(敗れり。未だ轉身の處を識らず。茅廣の漢、麻の如く粟に似たり。)巖頭頭を引いて、近前して曰く、因。(也た須らく機宜を識つて、始めて得べし。陷虎の機。是れ什麼の心行ぞ。)僧曰く、師の頭落ちぬ。(只だ錐頭の利を見て、鑿頭の方を見ず。甚の好惡をか識らん。)

りしを以
て途に土
匪の頭と
なり玉
仙芝と黨
を結び處
々々徘徊
て諸方を
荒らすに
一時途に
一劍を拾
ふ。見れ
ば天賜
黃巢と
の銘と
自の愈々
固く衝力
天大將軍
を陷れ長
自安

着せり。巖頭阿々大笑す。(盡天下の衲僧、奈何ともせず。天下の人を欺殺す。這の老漢の頭の落處を尋ぬるに得ず。)僧後に雪峰に到る。(依前として顛預懷懂。這の僧往々、十分に敗缺を納れ去る。)峰問ふ、什麼の處より來る。(來處を説かずんばある可からず。也た勘過せんことを要す。)僧曰く、巖頭より來る。(果然として敗缺を納る。)峰曰く、何の言句か有りし。(舉し得て、免れず棒を喫すること。)僧前話を舉す。(便ち好し趕ひ出すに。)雪峰打つこと三十棒して趕ひ出す。(然も斬釘截鐵すと雖も、甚に因てか只だ打つと分にあらず、何故ぞ、朝打三千、暮打八百。若し是れ同參にあらずんば、争でか端的を辨せん。然も是の如くなりと雖も、且く道へ、雪峰巖頭、什麼の處にか落在する。)

賜り巢故安し一昔は頭今亡ら克ららどす統年と號稱ら
のとも亡になる旦黃西の此せれ用す運、と號名を大號稱ら
は天た黃が長領がは意嚴、滅破李かれ稱大、齊國と

【評】大凡そ囊を挑け鉢を負うて、撥草瞻風せんには、也た須く
是れ行脚の眼を具して、始めて得べし。この僧、眼流星に似たるも
也た巖頭に勘破し了られて、一串に穿却せらる。當時若し箇の漢な
らば、或は殺或は活、擧着せば便ち用ひん。この僧透郎當にして、
却つて道ふ、收得すと。恁麼の行脚に似ば、閻羅老子、汝に問うて
飯錢を索むることあらん。知んぬ他、多少の草鞋を踏破して、直に
雪峰に到る。當時若し些子の眼筋有りて、便ち警地にして去ること
を解せば、豈に快ならざらんや。這箇の因縁、節角誦訛の處有り。
此の事然かも得失無しと雖ども、得失甚だ大なり。然も揀擇無しと
雖も、這裏に到りて、却つて眼を具して揀擇せんことを要す。看
よ他の龍牙、行脚の時、箇の問端を致して、徳山に問ふ、學人鑊鄒
の劍に仗つて、師の頭を取らんと擬する時如何。徳山頭を引いて、

遺れる意なり、頭云ふ巖、一頭云ふ巖、果して否、巢の分上、か、の、人々、固有の、劔、利云々、向ふ見、語なり、眼行脚、の師家、深淺を、るを云ふ

近前して曰く、回。龍牙曰く、師の頭落ちぬ。山便ち方丈に歸る。
牙後に洞山に舉似す。洞山曰く、徳山當時什麼とか道ひし。牙曰
く、他無語。洞山曰く、他語無きことは則ち且く置く、我れに徳山
落つる底の頭を借し來れ看ん。牙言下に於いて大悟す。遂に香を焚
いて、遙かに徳山を望んで、禮拜懺悔す。僧有り傳へて徳山の處に
到る、徳山曰く、洞山老漢好惡を知らず、這の漢死し來ること多少の
時にして、救ひ得るにも什麼の用處か有らん、這箇の公案、龍牙底と
一般なり。徳山方丈に歸へる、則ち暗中最も妙なり。巖頭大に笑ふ、
他笑中に毒有り、若し人有りて辨得せば、天下に横行せん。この僧
當時、若し辨得出せば、千古の下、檢責を免れ得ん、巖頭門下に於
て、已に是れ一場の蹉過、看よ他の雪峰老人、是れ同參にして、便
ち落處を知る、他の與めに説破せず、只だ打つこと三十棒して、院

〔遊郎當〕
一本には
碍郎當と
あり、當と
事あり、物
附會して
是とす、
の漢を云

〔鹽平の

碧巖錄 第七卷

五六

を趕出して、以て光前絶後なるべし。這箇は是れ作家、衲僧の鼻孔を拈じて、人の爲めにする底の手段なり、更に他の與めに、之れを若何ともせず、他をして自ら悟り去らしむ。本分の宗師、人の爲めにするに、有る時は籠罩して、伊れをして出頭せしめず、有る時は放つて、死郎當地ならしむ、却つて須く出身の處有る可し。大少大の巖頭、雪峰、倒まに箇の喫飯の禪和に勘破せらる。只だ巖頭、黄巢過ぎて後、還つて劍を收得するやと道ふが如きんば、諸人且く道へ、這裏合に什麼の語を下し得てか、他の笑を免れ得ん。又雪峰の棒を行して趕出することを免れ得ん。這裏の諸訛、若し曾て親しく證し、親しく悟らずんば、縦使ひ口頭快利にして、究竟に到るも、生死を透脱することを得ず。山僧尋常、人をして這の機關の轉處を觀しむ、若し擬議すれば、則ち遠くして之れ遠し。見ずや投子、鹽平

〔僧〕鹽平の
誤りなり
延平の
は福建の
延平府に
り、平僧は
疎山匡仁
の法嗣に
禪師なり

〔孟八郎〕

の僧に問うて曰く、黄巢過ぎて後、劍を收得するや。僧手を以て地を指す。投子曰く、三十年馬騎を弄す、今日却つて驢子に撲せらる。看よ這の僧、也た妨けず是れ箇の作家なることを。收得すと道はず、也た收不得と道はず、西京の僧と、海を隔つるが如くなることと在り。眞如拈じて曰く、他の古人、一箇は頭を做し、一箇は尾を做すこと定れり。雪竈の頌に曰く。

頌。黄巢過後、曾收劍。孟八郎漢、有甚麼用。大笑
還、應作者知。一子親得、能有幾箇。三十山藤、且
輕恕。同條生、同條死。朝三千、暮八百。東
便宜。據歎結案。悔不愼。當初也。有这些子。

讀方

黄巢過ぎて後、曾て劍を收む、(孟八郎の漢、什麼の用處か

第六十六則 巖頭黄巢收劍

五七

亂暴者の
こと或は
孟八は忘
仁義禮智
孝悌忠信
又は孝弟
忠信禮儀
廉恥の八
を忘るゝ
漢なりと
云へども
牽強附會
なるが如
し。〔山藤〕
出から切
の杖と藤
云ふこと

有らん。只だ是れ錫刀子の一口。大笑は還つて、應に作者知るべし。一子親しく得たり、能く幾箇か有る。是れ渠儂にあらずんば、争でか自由を得ん。三十山藤、且く輕恕す、(同條に生じ、同條に死す。朝三千、暮八百。東家の入死すれば、西家の入哀しみを助く。却つて與に救ひ得て活せしむ。便宜を得るは、是れ便宜に落つ。(歎に據つて案を結す。悔ゆらくは當初を慎しまざることを。也た些子有り。)

【評】黄巢過ぎて後、曾て劍を收む、大笑は還つて、應に作者知るべし、雪竇便ちこの僧と、巖頭大笑の處とを頌す。這箇の些子、天下の人摸索不着、且く道へ、他箇の什麼をか笑ふ。須らく是れ作家にして、方に這の笑中に權有り實有り、照有り用有り、殺有り活有ることを知るべし。三十山藤、且く輕恕す。這の僧後

に、雪峰の面前に到る、這の僧舊に依つて莽鹵、峰便ち令に據つて行じて、打つこと三十棒して、趕ひ出すことを頌す。且く道へ、什麼としてか却つて此の如くなる、汝情を盡して、此の話を會せんと要すや。便宜を得るは、是れ便宜に落つ。

第六十七則 傅大士講經

擧。梁武帝請傅大士講金剛經。達磨兄弟來也。無衲僧門下即不可。這老漢。老々大々作這般去就。大士便於座上揮案一下、便下座。直得火星迸散。似則似武帝愕然。兩度被他摸索不着。誌公問、陛下還會麼。黨不理不黨情。肘與三帝曰、不會。可惜。誌公曰、大士講經竟。

也須逐出國始得當時和誌公一時與
趕出國始是作家兩箇漢同坑無異土。

〔傳大士〕 婺州名翁人、建武四年生、妙光なるもの妻、り普成の二子、雲黄山に二樹を栽、自稱善慧

【讀方】 舉す。梁の武帝、傳大士を請じて、金剛經を講せしむ。(達磨の兄弟來れり。魚行酒肆には、即ち無にあらす、衲僧門下は、即ち不可。この老漢、老々大々として、這般の去就を作す。) 大士便ち座上に於いて、案を揮ふこと一下して、便ち下座す。(直に得たり火星迸散することを。似ることは則ち似たり、是なることは則ち未だ是ならず。葛藤を打することを煩はさず。) 武帝愕然たり。(兩回三度、人に瞞せらる。也た他をして摸索不着ならしむ。) 誌公問ふ、陛下還つて會すや。(理に黨して、情に黨せず。肘膊外に向はず。也た好し三十棒を與ふるに。) 帝曰く、不會。(可惜許。) 誌公曰く、大士講經し竟んぬ。(也た須らく國を逐出して、始めて得べし。當時誌公に和し

大士と號して、乘佛法中、禪宗の宗、風を達磨と同時に、擧揚せり、遺著に「傳大士語錄」心王銘、等ありて、世に行はる。〔火星迸散〕寸隙のなき處を云ふ。〔遮護〕自身を掩護して自身

て、一時に與に國を趕ひ出さば、始めて是れ作家。兩箇の漢、同坑に異土無し。

【評】 梁の高祖武帝は、蕭氏、諱は衍、字は叔達、功業を立て、以て齊の禪を受くるに至る。即位の後、別に五經を註して講議す。黄老を奉すること甚だ篤し。而も性至孝なり。一日出世の法を得て、以て劬勞に報いんことを思ふ。是に於て道を捨て、佛に事へ、廻ち菩薩戒を受く。婁約法師の處に於て、佛袈裟を披して、自ら放光般若經を講じて、以て父母に報ず。時に誌公大士、異を顯はし衆を惑はすを以て、獄中に繋がる。誌公乃ち身を分つて、城邑に遊化す。帝一日、之れを知りて感悟し、極めて之れを推重す。誌公數々遮護を行つて、隱顯測るべからざるに達ぶ。時に婺州に大士と云ふ者有り、雲黄山に居る、手から二樹を栽るて、之れを双林と

を擁護し
て人を知ら
しめてざる
を云ふる
桂禪師曰
天爲武帝
解事武帝
の爲め帝
災事を遮
り守護せ
り守護せ

碧巖錄 第七卷

謂ひ、自ら當來の善慧大士と稱す。一日書を修して、弟子に命じて、表を上つて帝に聞す。時に朝廷其の君臣の禮無きを以て受けず。傳大士金陵の城中に入つて、魚を賣らんとす。時に武帝誌公を請して、金剛經を講ぜしめんとすること有り。誌公曰く、貧道講ずること能はず。市中に傳大士と云ふ者あり、能く此の經を講ずと。帝詔を下し、之れを召して禁中に入る。傳大士既に至つて、講座の上にて、案を揮ふこと一下して、便ち下座す。當時便ち爲に推轉せば、一場の狼藉を見ることを免れん。還つて誌公に、陛下還つて會すやと云はれて、帝曰く不會。誌公曰く、大士講經し竟んぬと。是れ一人は頭めを作し、一人は尾りを作す。誌公恁麼に道ふ、還つて夢にだも傳大士を見んや、一等に是れ精魂を弄す、這箇中に就いて奇特なり。是れ死蛇なりと雖も、弄することを解すれば也た活

す、既に是れ講經、甚としてか却て大に分つて二と爲さる。一へに尋常座主の道ふが如くんば、金剛の體は堅固にして、物々壞すること能はず、利用なるが故に、能く萬物を摧くと。此の如く講說するを、方に喚んで講經と作す。然も是の如くなりと雖も、諸人殊に知らず、傳大士只だ向上の關振子を拈じて、略々鋒鋷を露はして人をして落處を知らしむ。直截して汝が爲めに壁立萬仞なることを。恰かも好し、誌公に好惡を識らず。却つて大士講經し竟んぬと云はる。正に是れ好心、好報を得ず。美酒一盞、却つて誌公に、水を以て攪過せらるゝが如く、一釜の羹、誌公に一顆の鼠糞を將つて、汚し了らるゝが如し。且く道へ、既に是れ講經せずんば、畢竟喚んで什麼とか作さん。

頌。不向雙林、寄此身、只爲他把不住。却於梁土、惹埃塵。若不入草、爭見端的。當時不得誌公老、作賊不須本。有也是栖々、去國人。正好一狀、牽伴底癩兒。

【讀方】雙林に向つて、此の身を寄せず、(只だ他の把不住なるが爲めなり。囊裏豈に錐を藏すべけんや。)却つて梁土に於て、塵埃を惹く。(若し草に入らずんば、争でか端的を見ん。風流ならざる處、也た風流。)當時誌公老を得ずんば、(賊と作つて本を須ひず。伴を牽く底の癩兒有り。)也た是れ栖々として、國を去る人ならん。(正に好し一狀に領過するに。便ち打つ。)

【譯】雙林に向つて、此の身を寄せず、却つて梁土に、埃塵を惹く、傅大士、没板齒の老漢と、一般に相逢ふ。達磨初め金陵に到つて、

(趕出) 趕出
去る 趕出
帝に 趕出
出され 趕出
契して 趕出
契は 趕出
契は 趕出
契は 趕出

武帝に見ゆ。帝問ふ、如何なるか是れ聖諦第一義。磨曰く、廓然無聖。帝曰く、朕に對する者は誰ぞ。磨曰く、不識。帝契はず。遂に江を渡り魏に至る。武帝舉して誌公に問ふ。公曰く、陛下還つて此の人を識るや否や。帝曰く、不識。誌公曰く、此れは是れ觀音大士、佛心印を傳ふ。帝悔いて、遂に使を遣はし、去つて取らんとす。誌公曰く、道ふこと莫れ、陛下使を發し、去つて取らんと、闔國人去るも、他亦回へらずと。所以に雪竇道く、當時誌公老を得ずんば、也た是れ栖々として、國を去る人ならんと。當時若し誌公、傅大士の爲めに、氣を出すにあらずんば、也た須らく是れ國を趕出し去るべし。誌公既に饒舌、武帝却つて他に熱瞞一上せらる。雪竇の大意に道く、他、梁土に來つて、講經して案を揮ふことを須ひず。所以に道ふ、何ぞ雙林に向つて此の身を寄せて、喫粥喫飯、分に隨

が故に、是非なく、出で下りしなり。

〔即今〕一本に過とあり、過に其意大を異に味

つて時を過ぎずして、却つて梁土に來つて、恁麼に指注して、案を揮ふこと一下して、便ち下座すと。是れ他、埃塵を惹く處なり、既に是れ殊勝を要する時は、則ち目に雲霄を視て、上佛有ることを見ず、下衆生有ることを見ず。若し出世の邊の事を論ぜば、免れず灰頭土面にして、無を將ちて有と作し、有を將ちて無と作し、是を將ちて非と作し、龜を將ちて細と作し、魚行酒肆、横拈倒用、一切の人をして、此れ箇の事を明らめしめん。若し恁麼に放行せずんば、直に彌勒下生に到るとも、也た一箇半箇も無けん。傳大士既に是れ拖泥帶水、頼ひに是れ知音有り。若し誌公老を得ずんば、幾乎んど國を趕出し了らん。且く道へ、即今什麼の處にか在る。

第六十八則 仰山呵々大笑

垂示曰。掀天關、翻地軸、擒虎兕、辨龍蛇。須是箇活鱗々漢、始得句々相投、機々相應。且從上來、什麼人合恁麼請舉看。

讀方 垂示に曰く。天關を掀け、地軸を翻し、虎兕を擒へ、龍蛇を辨す。須らく是れ箇の活鱗々の漢にして、始めて句々相投じ、機々相應することを得べし。且く從上來、什麼人か合に恁麼なるべき。請ふ舉す看よ。

す、即今、國を趕出、何處にあ、意に過し、て、趕過と、せ、趕過と、は、何處に、あるか、又、武帝の、不、會、誰、の、過、か、と、云、ふ、意、な、ら、ん、と、云、へ、り、云、へ、り、〔垂示曰〕

舉。仰山問。二聖、汝名什麼。名實相奪。聖曰。慧寂。坐斷舌頭。仰山曰。慧寂是我。各自守。聖曰。我名慧然。鬧市裏奪去。彼。仰山呵々大笑。可謂時節。錦上鋪花。天下人不知落處。何故土曠人稀、相逢者少。一似巖頭笑、又非巖頭笑。一等是笑、爲什麼却作兩段。具眼

相契ふ處
なり論ぜる

〔仰山〕瀛
二祖の第
賜智通大
師慧寂寂
禪師三十四
則參照四
〔三聖〕慧
臨濟下の
高足な
り、第四
十五則參
照系より
見れば、
仰山は百

者始定
當看。

【讀方】 擧す。仰山三聖に問ふ、汝名は何ぞ。(名實相奪ふ。勾賊破家。) 聖曰く、慧寂。(舌頭を坐斷す。旗を擡き鼓を奪ふ。) 仰山曰く、慧寂は是れ我れ。(各自に封疆を守る。) 聖曰く、我が名は慧然。(鬧市裏に奪ひ去る。彼此却つて本分を守る。) 仰山呵々大笑す。(謂つべし是れ箇の時節と。錦上に花を舖く。天下の人落處を知らず、何が故ぞ、土曠く人稀にして、相逢ふ者少し。一へに巖頭の笑に似て、又巖頭の笑に非ず。一等に是れ笑、什麼と爲てか却つて兩段と作す。具眼の者は始めに定當して看よ。)

【評】 三聖は是れ臨濟下の尊宿なり、少より出群の作略を具へて、大機あり大用有り、衆中に在りて、昂々藏々として、名諸方に聞

丈の孫百
三聖の曾孫
丈の曾孫年
なり、山年
輩亦長じて
居た難
ど實に難
兄難弟の
兩人であ
る。〔昂々〕高
く顯はる
る貌と云
丈夫と云
ふことな
り。〔向北方〕
河北鎮州
より江南
に至るな

ゆ。後臨濟を辭して、徧く淮海に遊ぶ、到る處の叢林、皆高賓を以て之れを待す。向北より南方に至る、先づ雪峰に造つて便ち問ふ、網を透る金鱗、未審し何を以てか食と爲んと。峰曰く、汝が網を出で來らんを待つて、即ち汝に向つて道はん。聖道は、一千五百人の善知識、話頭だも也た識らず。峰曰く、老僧住持事繁し。峰、寺莊に往く、路に彌猴に逢ふ、乃ち曰く、この彌猴、各々一面の古鏡を佩ぶ。聖曰く、歴劫名無し、何を以てか彰して古鏡と爲す。峰曰く、瑕生ぜり。聖曰く、一千五百人の善知識、話頭だも也た識らず。峯曰く、罪過、老僧住持事繁しと。後に仰山に至る、山極めて其の俊利なることを愛して、之れを明窓下に待す。一日官人有り、來りて仰山に參す。山問ふ、官何の位にか居する。曰く推官。山拂子を豎起して曰く、還つて這箇を推し得てんや。官人無語。衆人下語す

〔罪過〕一
 本には此
 の二字な
 し。推官善
 を進め悪
 を退くる
 官即ち
 犯罪の事
 を窮詰す
 るの官屬
 なり。

〔人〕を驗
 するに云
 々一知本
 にはこと
 らんこと

るに、俱に仰山の意に契はず。時に三聖病んで延壽堂に在り、仰山侍者をして、此の語を持して之れを問はしむ。聖曰く、和尚事有りやと。再び侍者をして、未審し什麼の事か有ると問はしむ。聖曰く、再犯容さず。仰山深く之れを肯ふ。百丈當時禪版蒲團を以て黄檗に付し、拄杖拂子を瀕山に付す。瀕山後に仰山に付す。仰山既に大に三聖を肯ふ。聖一日辭し去る。仰山拄杖拂子を以て、三聖に付せんとす。聖曰く、某甲已に師有り。仰山其の由を詰る。乃ち臨濟の的の子なり。只だ仰山三聖に問ふが如きんば、汝名は何ぞ。他其の名を知らざる可からず、何が故ぞ、更に恁麼に問ふ。所以に作家人を驗するに、子細を知ることを得んと要す、只だ等閑に似て問うて曰く、汝名は何ぞ。更に道ふに計較無し、何が故ぞ、三聖慧然と云はずして、却つて慧寂と道ふ。看よ他の具眼の

を得しと
 の二字な

漢、自然に同じからざることを。三聖恁麼、又是れ顛するにあらす、一向に旗を擡き鼓を奪ふ、意、仰山の語外に在りて、此の語常情に墮せず、摸索を爲し難し。這般の漢の手段、却つて人を活得す。所以に道ふ、他活句に參じて、死句に參ぜざれと、若し常情に順ぜば、則ち人を歇むることを得ざらん。看よ他の古人、道を念ふこと此の如し、精神を用ひ盡して、始めて能く大悟す。既に悟り了つて用ふる時、還つて未悟の時の人に同じく相似たり、分に随つて一言半句、常情に落つることを得ず。三聖他の仰山の落處を知つて、便ち他に向つて道ふ、我が名は慧寂と。仰山三聖を收めんと要す、三聖倒まに仰山を收む。仰山只だ就身打劫を得て道ふ、慧寂は是れ我と。是れ放行の處なり。三聖曰く、我が名は慧然と。亦是れ放行す。所以に雪竇、後面に頌して曰く、雙收雙放、若爲が宗とせん。只

だ一句の内に、一時に頌し了る。仰山呵々大笑す。也た權有り實有りの、也た照有り用有り、他の八面玲瓏たるが爲めに、所以に用處、大自在を得たり。這箇の笑、巖頭の笑と同じからず、巖頭の笑は、毒藥有り、這箇の笑は、千古萬古、清風凜々地。雪竇の頌に曰く。

頌。雙收雙放、若爲宗、知他有幾人。八面玲瓏。騎虎

由來、要絶功。若不是項門上、有眼、肘臂下有符、爭得得到

人、爭明笑罷不知、何處去、難得。言猶在耳。千恁麼人、也

恁麼事。只應千古、動悲風。如今在什麼處。咄。既是大笑、

漫。風。只應千古、動悲風。大地黑漫。

〔若爲〕如
何に同じ

讀方 雙收雙放、若爲が宗とせん、(知んぬ他幾人か有る。八面玲瓏。將に謂へり、眞箇恁麼の事有らんと。)虎に騎る由來、絶功を要す。

〔四〕百軍
州)趙宋
の)代天
支)那區
下)を分
軍)一區
ち)一州
な)一州
定)一州
り)一州

(若し是れ頂門上に眼有り、肘臂下に符有るにあらずんば、争でか這裏に到ることを得ん。騎ることは則ち妨げず、只だ恐らくは汝下ることを得ざらんことを。是れ恁麼の人にあらずんば、争でか恁麼の事を明らめん。)笑ひ罷んで知らず、何の處にか去る、(盡四百軍州、恁麼の人を覓むるに、也た得難し。言猶ほ耳に在り。千古萬古、清風有り。)只だ應に千古、悲風を動かすべし。(如今什麼の處にか在る。咄。既に是れ大に笑ふ。什麼としてか却つて悲風を動かす。大地黑漫々。)

【評】 雙收雙放、若爲が宗とせん、放行して互に賓主と爲る。仰山曰く、汝名は何ぞ。聖曰く、我が名は慧寂、是れ雙放なり。仰山曰く、慧寂は是れ我れ。聖曰く、我が名は慧然と、是れ雙收なり。其の實は是れ互換の機、收むる時は則ち大家收め、放つときは則ち大家

〔古人〕首
山省念な

放つ。雪竇一時に頌し盡し了れり。他の意に道く、若し放收にあらず、若し互換にあらずんば、汝は是れ汝、我れは是れ我れ、都來只だ四箇の字、甚に因つてか却つて裏頭に於て、出沒卷舒する。古人道く、汝若し立たば、我れ便ち坐す、汝若し坐せば、我れ便ち立つ、若し也た同坐同立ならば、二り俱に瞎漢と。此れは是れ雙收雙放、以て宗要と爲すべし。虎に騎る由來、絶功を要す、此の如きの高風、最上の機要有り、騎らんと要せば、便ち騎り、下らんと要せば、便ち下る。虎頭に據ることも亦得たり、虎尾を收むることも亦得たり、三聖、仰山、二り俱に此の風有り。笑ひ罷んで知らず、何の處にか去る、且く道へ、他箇の什麼をか笑ふ。直に得たり清風凛々たることを。什麼としてか末後に却つて道ふ、只だ應に千古、悲風を動すべしと。也た是れ死して弔せず、一時に汝が爲めに注解し了れ

り。争奈せん天下の人、啗啄すれども入らず、落處を知らざることを。縦ひ是れ山僧も、也た落處を知らず、諸人還つて知るや。

第六十九則 南泉一圓相

垂示曰。無啗啄處。祖師心印。狀似鐵牛之機。透荆棘林。衲僧家。如紅爐上一點雪。平地上七穿八穴。則且止。不落寅緣。又作麼生。試舉看。

〔啗啄〕共
に嚙むと
云ふ字な
り。啗さな
ば啗啄な
は、齒の

讀方 垂示に曰く。啗啄無き處、祖師の心印、狀鐵牛の機に似たり。荆棘林を透るの衲僧家、紅爐上一點の雪の如し。平地上七穿八穴なることは則ち且く止く、寅緣に落ちざる、又作麼生、試みに舉す看よ。

立て無き處も
て宇宙の形
本體に思議
相不可思議
不可思議の
處を云ふ
也。云ふ
【寅縁】
縁なり、
連絡の義
に於て、
色々と復
雜なる
貌、
和訓マツ
ハル、
て、
と、
味と見る
ことあり
【南泉】
普

擧。南泉歸宗麻谷、同去禮拜忠國師。至中路、
三人同行、必有我師。有。南泉於地上、畫一圓
相曰、道得即去。無風起浪也。要人知。擲却陸 歸宗
於圓相中坐。一人打鑼、麻谷便作女人拜。一人
打鼓。三 泉曰、恁麼則不去也。半路抽身、是好人。好
歸宗曰、是什麼心行。賴得一識破。當時好
與一掌。孟八郎漢。

【讀方】 擧す。南泉、歸宗、麻谷、同じく去つて忠國師を禮拜せんとす。
中路に至りて、(三人同じく行けば、必らず我が師有り。什麼の奇特
か有らん。也た端的を辨せんことを要す。)南泉地上に於て、一圓相
を畫して曰く、道ひ得ば即ち去らん。(風無きに浪を起す。也た人の

頭禪師。
【麻谷】
徹禪師之
れ前に既
に出づ。
【歸宗】
馬
祖道一禪
師の法
嗣、
九世の法
孫、
廬山の
歸宗寺に
住す。
【忠國師】
慧忠國師
なり、
祖に嗣、
六法、
す、
唐の宗
蕭宗代宗
の二皇帝
に尊敬せ
られ、
古今

知らんことを要す。陸沈の船を擲却す。若し驗過せずんば、争でか
端的を辨せん。歸宗圓相の中に於て坐す。(一人鑼を打てば、同道方
に和す。)麻谷便ち女人拜を作す。(一人鼓を打てば、三箇も也た得
たり。)泉曰く、恁麼ならば則ち去らず。(半路にして身を抽んず、是
れ好人。好一場の曲調。作家作家。) 歸宗曰く、是れ什麼の心行
ぞ。(頼ひに識破することを得たり。當時好し一掌を與ふるに。孟八
郎の漢。)

【評】 當時馬祖、化を江西に盛んにす。石頭の道は、湖湘に行はる。
忠國師の道は、長安を化す。他親しく六祖に見え來る。此の時南方
に、頭を擧げ角を帯ぶる者、其の堂に升り、其の室に入らんと欲せ
ざる有ること無し、若し爾らずんば、人の爲めに恥づる所。這の老
漢三箇、去つて忠國師を禮拜せんと欲す、中路に至つて、這の一場の

寶也患這
般病痛

〔由基が
箭云々〕
三大老圓
相の行處
を讚嘆せ

〔高々の

讀方 由基が箭猿を射る、(當頭の一路、誰れか敢て向前せん。觸處妙を得たり。未だ發せざるに先づ中る。) 樹を遶る何ぞ太だ直なる。(若し承當せずんば、争でか敢て恁麼ならん。東西南北一家風。已に周遮すること多時なり。) 千箇と萬箇と。(麻の如く粟に似たり。野狐精の一隊。南泉を得て争奈何。) 是れ誰れか曾て的中つ。(一箇半箇。更に一箇も没し。一箇も也た用ふることを得ず。) 相呼び相喚んで、歸去來。(一隊泥團を弄する漢。如かず歸り去るの好からんには。却つて些子に較れり。) 曹溪路上、登陟することを休めよ。(太勞生。想ひ料るに、是れ曹溪門下の客にあらず。低々の處、之れを平ぐるに餘り有り、高々の處、之れを觀るに足らず。) 復曰く、曹溪路

處云々
未だ圓成
せざる意
味なり
恰も日本
の諺に
帶に短か
しと云ふ
が如し

坦平、什麼としてか登陟することを休む。(唯だ南泉半路にして、身を抽んづるのみにあらず、雪竇も亦乃ち半路にして身を抽んづ。好事も無きに如かず、雪竇も亦這般の病痛を患ふ。)

【譯】 由基が箭猿を射る、樹を遶ること何ぞ太だ直なると。由基は乃ち是れ楚の時の人、姓は養、名は叔、字は由基。時に楚の莊王出て獵す、一の白猿を見て、人をして之れを射しむ。其の猿箭を捉へて戯る、群臣に勅して、之を射しむ、中つる者莫し。王遂に群臣に問ふ、群臣奏して曰く、由基と云ふ者善く射ると。遂に之れを射しむ。由基弓を彎くに方つて、猿乃ち樹を抱いて悲號す、箭發する時に至つて、猿樹を遶つて之を避く、其の箭も亦樹を遶つて中つて殺す。此れ乃ち神箭なり。雪竇何が故ぞ、却つて言ふ太だ直なりと。若し是れ太だ直ならば則ち中らず、已に是れ樹を遶る、何が故

ぞ却つて云ふ、太だ直なりと。雪竇其の意を借る、妨けず用ひ得て好し。此の事春秋に出づ。有る者は道ふ、樹を遶るは是れ圓相と。若し眞箇此の如くならば、蓋し語の宗旨を識らず、太だ直なる處を知らず。三箇の老漢、途を殊にして、歸きを同じうす、一揆一齊に太だ直なり。若し是れ他の去處を識得せば、七縱八橫、方寸を離れず、百川異流、同じく大海に歸す。所以に南泉道く、恁麼ならば則ち去らずと。若し是れ衲僧、正眼に觀着せば、只だ是れ精魂を弄す。若し喚んで精魂を弄すと作さば、却つて是れ精魂を弄するにあらず。五祖先師道く、他の三人、是れ慧炬三昧、莊嚴王三昧、然かも此の如く女人拜を作すと雖ども、他終に女人拜の會を作さず、圓相を畫すと雖ども、他終に圓相の會を作さず、既に恁麼に會せずんば、又作麼生か會せん。雪竇道く、千箇と萬箇と、是れ誰れか會て

的に中つると、能く幾箇有つてか、百發百中する。相呼び相喚んで、歸去來、南泉の恁麼ならば則ち去らずと云ふことを頌す。南泉此れより去らず、故に曰ふ、曹溪路上、登陟することを休むと、荆棘林を滅却す。雪竇把不定にして、復曰く、曹溪路坦平、什麼としか登陟を休むと。曹溪の路、塵を絶し迹を絶して、露皐々赤灑々、平坦々儻然地なり、什麼としてか却つて登陟を休む、各自に脚下を看よ。

第七十則 百丈咽喉唇吻

垂示曰。快人一言、快馬一鞭、萬年一念、一念萬年。要知直截、未舉已前。且道、未舉已前、作麼生摸索。請舉看。

〔萬年〕一
念云々
此の語三
祖大師の
信心銘に
あり
〔直截〕二
念に涉ら
ざること

〔讀方〕 垂示に曰く。快人の一言、快馬の一鞭、萬年一念、一念萬年。直截を知らんと要せば、未だ舉せざる已前。且く道へ、未だ舉せざる已前、作麼生か摸索せん、請ふ舉す看よ。

擧。瀉山五峰雲巖、同侍立百丈。阿呵々。終始諸。百丈問瀉山、併却咽喉唇吻、作麼生道。一將。瀉山曰、却請和尚道。借路。丈曰、我不辭。難求。向汝道、恐已後、喪我兒孫。三寸。和泥合水。就身打劫。

〔五峰〕筠
州五峯の
常觀禪
師、瀉山
の法弟に

〔讀方〕 擧す。瀉山、五峰、雲巖、同じく百丈に侍立す。阿呵々。終始諸訛。君は西秦に向ひ、我は東魯に之く。百丈瀉山に問ふ、咽喉唇吻を併却して、作麼生か道はん。一將は求め難し。瀉山曰く、却

〔雲巖〕潭
州雲巖の
曇晟禪師
なり、初師
隨身すに
こ廿年
丈遷化の
後、藥山の
惟儼禪師
に嗣法す

〔古人〕雲
門なり。

つて請ふ、和尚道へ。路を借りて經過す。丈曰く、我れ汝に向つて道ふことを辭せず、恐らくは已後、我が兒孫を喪せんことを。免れず老婆心切なることを。面皮厚きこと三寸。和泥合水。就身打劫。〔評〕 瀉山、五峰、雲巖、同じく百丈に侍立す、百丈瀉山に問ふ、咽喉唇吻を併却して、作麼生か道はん。山曰く、却つて請ふ、和尚道へ。丈曰く、我れ汝に向つて道ふことを辭せず、恐らくは已後、我が兒孫を喪せんことを。百丈然も此の如くなり、雖ども、鍋子已に別人に奪ひ去り了らる。丈復五峰に問ふ、峰曰く、和尚也。須らく併却すべし。丈曰く、人無き處に祈願して汝に望まん。又雲巖に問ふ、巖曰く、和尚有りや也。未だしや。丈曰く、我が兒孫を喪せん。三人各是れ一家。古人道く、平地上に死人無數、荆棘林を過ぎ得る者、是れ好手と。所以に宗師家、荆棘林を以て人を驗

他を尋ぬるに得ざることを。答處蓋天蓋地。

【評】此の三人の答處、各々同じからず、也た壁立千仞なる有り、也た照用同時なる有り、也た自救不了なる有り。却つて請ふ、和尚道へと。雪竇便ち此の一句中に向つて、機を呈し了れり、更に中に就いて軽々に拶して、人をして見易からしむ、曰く、虎頭に角を生じて、荒草を出づと。瀉山の答處、一へに猛虎頭上に角を安するに似たり、什麼の近傍の處か有らん。見ずや僧羅山に問ふ、同生不同死の時如何。山曰く、牛の角無きが如し。僧曰く、同生亦同死の時如何。山曰く、虎の角を戴くが如し。雪竇只だ一句に頌し了れり。他轉變の餘才有りて、更に曰く、十洲春盡きて、花凋殘と。海上に三山十洲有り、百年を以て一春と爲す、雪竇の語、風措を帯びて、宛轉盤礴す。春盡くるの際、百千萬株の花、一時に凋殘す、獨り珊

〔羅山〕道
閑禪師、
巖頭の嗣
なり。

〔盤礴〕坦

靜の貌。

〔附〕所の附屬
國の意な
り。火浣布
列子湯問
篇に火浣
布は火に
浣ふに必
ず火に經
りて、郭
山註今
曰く、東
扶南萬
里あり、
國あり、
復五里
許に火
山に

珊瑚樹林のみ有つて、凋落を解せず、太陽と相奪うて、其の光交映す、正當恁麼の時、妨けず奇特なることを。雪竇此れを用ひて、他の却つて請ふ、和尚道へと云ふことを明かす。十洲は皆海外諸國の附する所なり、一には祖洲、反魂香を出す、二には瀛洲、芝草、玉石、泉の酒味の如くなるを出す、三には玄洲、僊薬を出す、之を服すれば長生す、四には長洲、木瓜、玉英を出す、五には炎洲、火浣布を出す、六には元洲、靈泉の蜜の如くなるを出す、七には生洲、山川有りて、寒暑無し、八には鳳麟洲、人は鳳喙麟角を取つて、續弦膠を煎す、九には聚窟洲、獅子銅頭鐵額の獸を出す、十には檀洲、一に流洲に作る。琨吾石を出す、劔を作れば玉を切るに泥の如し。珊瑚は、外國雜傳に曰く、大秦の西南、漲海の中、七八百里可りにして、珊瑚洲に到る、洲底に盤石あり、珊瑚其の石上に生ず、人鐵網

方を見て遠
貌を見る

碧巖錄 第八卷

三三

【評】 瀋山は封疆を把定し、五峰は衆流を截斷す、この些子、是れ箇の漢にして、當面に提撥せんことを要す。馬前の相撲の如く、擬議を容れず、直下に便ち用ひて、緊迅危峭なり、瀋山の盤礴滔々地なるに似ず。如今の禪和子、只だ架下に向つて行いて、他の一頭地を出づること能はず、所以に道ふ、親切を得んと欲せば、問を將ち來つて問ふと莫れと。五峰の答處、當頭に坐斷す、妨けず快俊なることを。百丈曰く、人無き處、斫額して汝を望まんと、且く道へ、是れ他を肯ふか、是れ他を肯はざるか、是れ殺か是れ活か、他の阿鞞々地なるを見て、只だ他に一點を與ふ。雪竇の頌に曰く。

頌。和尚也併却。

已在言前了。截斷衆流。

龍蛇陣上看謀

畧。須是金牙始解。

七。事隨身慣戰作家。

令人長憶李將軍、妙手無多子。正馬單

鎗。千里萬里。萬里天邊飛一鷲。大衆見麼。且道、落、在、千、人、萬、人。也。打、曰、飛、也、過、去。

〔龍蛇陣〕
武備志に
曰く、青龍
の獸也、龍
方は青龍
の獸也、龍
龍陣と云
ふ、西の方
は白虎の方
虎陣と云
ふ、南の方
は朱雀の方
獸なり、の
鳥陣と云
ふ、北の方
は玄武の方

【讀方】 和尚也併却すべし、(已に言前に在り了る。衆流を截斷す。) 龍蛇陣上に謀略を見る。(須らく是れ金牙にして、始めて解すべし。七。事身に隨ふ。戰に慣ふ作家。) 人をして長へに李將軍を憶はしむ。(妙手多子無し。正馬單鎗。千里萬里。千人萬人。) 萬里の天邊一鷲を飛ばす。(大衆見るや。且く道へ、什麼の處にか落在する。中れり。打して曰く、飛過し去る。)

【評】 和尚も也併却すべしと、雪竇一句の中に於いて、撈一撈して曰く、龍蛇陣上に、謀略を見ると。兩陣を排して、突出突入、七。縱八橫、鬪將底の手脚有り、大謀略底の人有りて、正馬單鎗にして、

に根本の四句と合
せたる百と
なる非之
を百非と
云ふ非と
れども非
一に切に
證論の言
總稱量言
四句百非
と云ふ非
無有非有
々々非有
無有非有
異ひ有と
と云ふ有
と云ふ有

何れに
て大し
小異同
いん抱
云々抱
盗人抱
の盗抱
と云ふ
と云ふ
自ら好
で辱を
ふ辱を
りふ辱
〔切々〕
ふる貌
は餘計
ふ程の
ふ程の
成都蜀

と。且く道へ、この僧、是れ會し來つて問ふか、會し來らずして問ふか、此の問妨けず深遠なることを。四句を離るゝとは、有と無と、非有非無と、非々有と、非々無となり、此の四句を離るれば其の百非を絶す、只管に道理を作さば、話頭を識らず、頭腦を討ぬとも見えず。若し是れ山僧ならば、馬祖の道ひ了らんを待つて、便ち與めに坐具を展べて、禮三拜して、他の作麼生と道はんを看ん。當時馬祖ならば、若しこの僧來つて、四句を離れ、百非を絶して、請ふ師某甲に西來意を直指せよと問はんを見て、拄杖を以て、劈脊に便ち棒して趕出して、他の省するか省せざるかを看ん。馬大師只管に、他の與めに葛藤を打す、以てこの漢、當面に蹉過して、更に去つて智藏に問はしむるに至る、殊に知らず、馬大師來風深く辨ずること。この僧儻として、走り去つて智藏に問ふ、藏曰く、何ぞ和尚

に問はざる。僧曰く、和尚教へ來つて問はしむ。看よ他この些子、拶着すれば便ち轉ず、更に閑暇の處なきことを。智藏曰く、我れ今日頭痛す、汝が爲めに説き得ること能はず、海兄に問取し去れ。この僧又去つて海兄に問ふ。海兄曰く、我れ這裏に到つて、却つて不會。且く道へ、什麼としてか、一人は頭痛と道ひ、一人は不會と云ふ、畢竟作麼生。この僧却回し來つて、馬大師に舉似す。師曰く、藏頭白、海頭黒と。若し解路を以て卜度せば、却つて之れを相瞞すと云ふ。有る者は道ふ、只だ是れ相推過すと。有る者は道ふ、三箇總に他の問頭を識る、所以に答へずと。總に是れ拍盲地、一時に古人醍醐の上味を將つて、毒藥を着けて裏許に在く、所以に馬祖道く、汝が一口に西江の水を吸盡せんを待つて、即ち汝に向つて道はんと、此の公案と一般なり。若し藏頭白、海頭黒を會得せば、便ち

の地なり
龍惟勝なり
南禪師に
嗣法す
智度
州西堂
百丈禪師
道一馬祖
の法嗣なり
丈懷海禪
師なり

生封或
は風に記
の註史
く大帝曰
天吹塵
垢去る
と夢む
帝寤め
歎じて
令風は
を執る
土去る
は天后
登に姓
は下

碧巖錄 第八卷

西江水の話を書きせん。この僧、一擔の懐童を將ちて、箇の不安樂に換へ得て、更に他の三人の尊宿を勞して、泥に入り水に入らしむ畢竟この僧警地ならず。然も一へに恁麼なりと雖ども、この三箇の宗師却つて箇の擔板漢に勘破せらる。如今の人、只管に語言上に去つて、活計を作して曰ふ、白は是れ明頭合し、黒は是れ暗頭合すと。只管に鑽研計較す、殊に知らず、古人の一句、意根を截断することを。須らく是れ正脈裏に向つて、自ら看て始めて穩當なることを得べし。所以に道ふ、最後の一句、始めて牢關に到る、要津を把断して、凡聖を通ぜずと。若し此の事を論ぜば、當門に一口の劍を按ずるが如くに、相似たり、擬議せば則ち喪身失命せん。又道く譬へば、劍を擲つて空に揮ふが如し、及と不及とを論ずること莫れと。但八面玲瓏の處に向つて會取せよ、見すや、古人道く、この漆

桶、或は曰く、野狐精、或は云く、瞎漢と。且く道へ、一棒一喝と、是れ同か是れ別か、若し知らば、千差萬別、只だ是れ一般なり、自然に八面に敵を受けん。藏頭白、海頭黒を會せんと要すや。五祖先師道く、封后先生と、雪竇の頌に曰く。

頌。藏頭白海頭黒、半合半開。一手擲。明眼衲僧、會不得。更行脚三十年。終是被三人穿却。馬駒踏殺天。下人。叢林中也。須是這老。臨濟未是白拈賊。也。被入捉了也。離四句、絶百非、道什麼也。須是自點。天上人間、唯我知。用我作什麼。奪却拄杖子。或若無人無我無得無失。將什麼知。

讀方 藏頭白、海頭黒、(半合半開。一手擲一手擲。金聲玉振ふ。)

第七十三則 馬祖四句百非

風名は后
なるもの
有らんや
と、是に
於て、し
て、れを
求め、風
后なるも
の、海隅
に、得た
り、登相
て、以て
今、馬祖
の、一句
く、假能
拂ふ、誦
せ、る者
に、口區
に、似擔
の、無言
馬、駒踏

殺馬祖
の、こと
曾て、馬
の、曹溪
慧能、禪
の、父、讓
南嶽、懷
禪、師、向
し、つて、云
出、づ、語、り
唱、に、あり
見、よ、阿
父、の、稱、呼
な、り、南、方
者、は、北、方
者、は、北、方

碧巖錄 第八卷

明眼の衲僧、會不得。(更に行脚すること三十年せよ。終に是れ人に汝が鼻孔を穿却せらる。山僧故らに是れ口區擔に似たり。)馬駒踏殺す、天下の人。(叢林中也た須らく是れ這の老漢にして、始めて得べし。這の老漢を放出す。)臨濟未だ是れ白拈賊にあらず。(癩兒伴を牽く。直饒ひ好手も、也た人に捉へ了らる。)四句を離れ、百非を絶す。(什麼と道ふぞ。也た須らく是れ自ら點檢して看るべし。阿爺は阿爹に似たり。)天上人間、唯だ我れ知る。(我を用ひて什麼か作さん。拄杖子を奪却せん。或は若し人も無く我も無く、得も無く失も無くんば、什麼を將つてか知らん。)

【評】藏頭白、海頭黒、且く道へ、意作麼生、這の些子、天下の衲僧跳不出。看よ他雪竇後面に合殺し得て好きことを。道はく直饒ひ是れ明眼の衲僧も、也た會不得、這箇の些子の消息、之れを神仙

の秘訣、父子不傳と謂ふ。釋迦老子、一代時教を説く、末後單傳の心印、喚んで金剛王寶劍と作し、喚んで正位と作す。恁麼の葛藤、早く是れ事已むことを獲ずして、古人略々些子の鋒銳を露はす。若し是れ透得底の人ならば、便ち七穿八穴して、大自在を得ん。若し透不得ならば、從前悟入の處無し、轉た説けば、轉た遠からん。馬駒踏殺す、天下の人、西天の般若多羅、達磨を識して曰く、震旦澗しと雖ども別路無し、兒孫の脚下を假つて行かんことを要す、金鷄一粒粟を銜むことを解して、十方の羅漢僧に供養す。又六祖讓和尚に謂うて曰く、向後佛法、汝が邊より去らん、已後一馬駒を出して、天下の人を踏殺せんと。厥の後紅西の法嗣天下に布く、時に馬祖と號す、達磨六祖、皆先馬祖を識す。看よ他の作略、果然として別なることを。只だ道ふ、藏頭白、海頭黒と、便ち天下の人を踏殺

第七十三則 馬祖四句百非

の俗なり
〔讓和尙〕
南嶽慧讓
和尙のこ
と。達磨六
祖曰く達
磨六祖と
は、誤り
か、般若
多羅と六
祖となし
ふなりと

碧巖錄 第八卷

六四八

する處を見る。只だ這の一句、黑白の語、千人萬人咬不破。臨濟未だ是れ白拈賊にあらず、臨濟一日衆に示して曰く、赤肉團上に、一無位の眞人有り、常に汝等諸人の面門に向つて出入す、未だ證據せざる者は看よ看よと。時に僧有り出で、問ふ、如何なるか是れ無位の眞人。臨濟禪牀を下りて、搦住して曰く、道へ道へ。僧無語。濟托開して曰く、無位の眞人、是れ什麼の乾屎橛ぞと。雪峰後に聞いて曰く、臨濟大に白拈賊に似たり。雪竇他の臨濟と相見せんことを要す。馬祖の機鋒を觀るに、尤も臨濟に過ぎたり、此れ正に是れ白拈賊、臨濟は未だ是れ白拈賊にあらざるなり、雪竇一時に穿却し了れり。却つて這の僧を頌して道ふ、四句を離れ、百非を絶す、天上人間、唯だ我れ知ると。且く鬼窟裏に向つて、活計を作すこと莫れ。古人道く、問は答處に在り、答は問處に在りと、早く

〔眞如〕慕
詰禪師也

是れ奇特なり、汝作麼生か、四句を離れ得、百非を絶し得ん。雪竇道く、此の事唯だ我れ能く知ると。直饒ひ三世の諸佛も、又覩不見既に是れ獨り自ら箇を知る、諸人更に上來して、箇の什麼をか求めん。大滂の眞如拈じて曰く、這の僧恁麼に問ひ、馬祖恁麼に答ふ、四句を離れ、百非を絶す、智藏海兄、都て知らず、會せんと要すや、道ふことを見ずや、馬駒踏殺す、天下の人と。

第七十四則 金牛飯桶

垂示日。鏡鄒橫按、鋒前翦斷葛藤窠。明鏡高懸、句中引出毘盧印。田地穩密處、着衣喫飯、神通遊戲處、如何湊泊。還委悉麼。看取下文。

第七十四則 金牛飯桶

六四九

〔毘盧〕梵語、毘盧舍那、遍一切處、謂無量、字宙に充ち居るものと云ふこと。

碧巖錄 第八卷

六五〇

【讀方】垂示に曰く。鏡鄒横に按じて、鋒前に葛藤窠を剪斷す。明鏡高く懸つて、句中に毘盧印を引出す。田地穩密の處、着衣喫飯、神通遊戯の處、如何が湊泊せん。還つて委悉すや。下文を看取せよ。

擧。金牛和尚、毎至齋時、自將飯桶、於僧堂前作舞、呵々大笑曰、菩薩子喫飯來。竿頭絲線、從君

弄、不犯清波、意自殊。醍醐毒藥一時行。是則是。七珍八寶、一時羅列。爭奈相逢者少。雪竇曰、雖然

如此、金牛不是好心。是賊識賊。是精識精。來。僧

問長慶、古人道、菩薩子喫飯來、意旨如何。

不不妨疑着。元來不知。慶曰、大似因齋慶讚。相席打落處。長慶道、什麼。結案。

〔金牛〕和尚、馬祖大師の法嗣、門下八十餘人中、餘一人、鎮州の産。

〔長慶〕雪峯の第二法嗣、第三則にあり。〔慶讚〕賀讚の義、凡そ土物の出来場。

【讀方】擧す。金牛和尚、齋時に至る毎に、自ら飯桶を將つて、僧堂前に於て舞を作し、呵々大笑して曰はく、菩薩子喫飯來と。(竿頭の絲線、君が弄するに従ふ、清波を犯さず、意自殊なり。醍醐毒藥、一時に行ず。是は則ち是。七珍八寶、一時に羅列す。爭奈せん相逢ふ者少きことを。)雪竇曰く、然も此の如しと雖ども、金牛是れ好心にあらず。(是れ賊、賊を識る。是れ精、精を識る。來つて是非を説く者は、便ち是れ是非の人。)僧長慶に問ふ、古人道ふ、菩薩子喫飯來と、意旨如何。(妨けず疑着することを。元來落處を知らず。長慶、什麼と道ふぞ。)慶曰く、大に齋に因つて慶讚するに似たり。(席を相て令を打す。欸に據つて案を結す。)

【譯】金牛は乃ち馬祖下の尊宿なり、齋時に至る毎に、自ら飯桶を將ちて、僧堂前に於て舞を作し、呵々大笑して曰く、菩薩子喫飯來

第七十四則 金牛飯桶

六五一

合に目出
度いと云
ふが如き
語也

碧巖錄 第八卷

六五三

と、是の如くする者二十年、且く道へ、他の意什麼の處にか在る。
若し喚んで喫飯と作さば、尋常魚を敲き鼓を撃つて、亦自ら告報
せん、又何ぞ須ひん、更に自ら飯桶を將ち來つて、許多の伎倆を
作すことを。是れ他顧すること莫しや、是れ提唱建立すること莫し
や。若し是れ此の事を提唱せば、何ぞ寶華王座上に去つて、床を敲
き拂を豎てざる、此の如きことを須ひ要して、什麼とか作さん。今
の人殊に知らず、古人の意、言外に在ることを。何ぞ且く祖師當
時、初來底の題目、什麼とか道ひしと看ざる。分明に説いて道ふ、
教外別傳、單傳心印と。古人の方便、也た只だ汝をして、直截に承
當し去らしむ。後來の人、妄りに自ら卜度して、便ち道ふ、那裏に
か許多の事有らん、寒する時は則ち火に向ひ、熱する時は則ち涼に
乗じ、飢うる時は則ち飯を喫し、困する時は則ち眠りを打すと。若

「好心に
あらず尋
常容易の
手段で
はなすべ
く看過ぎ
からざる
作略あり
と云ふ意

し恁麼に常情を以て、義解詮注せば、達磨の正宗、土を掃つて盡き
ん。知らず古人、二六時中に向つて、念々捨てず、此の事を明らめ
んと要することを。雪竇曰く、然も是の如しと雖ども、金牛是れ好
心にあらずと。只だ這の一句、多少の人錯つて會す、所謂醍醐の上
味、世の爲めに珍とせらるるも、斯等の人に遇へば、翻つて毒藥と成
る。金牛既に是れ落草して、人の爲めにす、雪竇什麼としてか道ふ
是れ好心にあらずと。什麼に因つて却つて恁麼に道ふ、衲僧家須ら
く是れ生機有つて、始めて得べし。今の人古人の田地に至らずして
只管に道ふ、什麼の心を見、什麼の佛か有らんと。若し這の見解
を作さば、金牛老作家を壞却し了らん、也た須らく是れ子細に看て
始めて得べし。若し只だ今日明日、口快の些子ならば、了期有ること
と無けん。後來長慶上堂す、僧問ふ、古人道く、菩薩子喫飯來と、

第七十四則 金牛飯桶

六五三

〔忒煞甚
だに同じ

意旨如何。慶曰く、大に齋に因つて慶讚するに似たりと。尊宿家忒煞だ慈悲、遍逗少なからず。是なることは則ち是、齋に因つて慶讚すと。汝且く道へ、箇の什麼をか慶讚する、看よ他の雪竇の頌に曰く。

頌。白雲影裏笑呵々、笑中有刀。熱發作什麼。兩手持來、付與他。

得麼。若是本分衲僧。不喫這般茶飯。若

是金毛獅子子、須是他格外始得。許三千里外

見誦訛。不直半文錢。一場遍逗。瞎漢。

〔圖方〕白雲影裏笑呵々、(笑中に刀有り。熱發して什麼か作さん。

〔白雲影
裏〕飯桶
の白飯を
指すと
云ひ、又

天下の衲僧、落處を知らず。兩手に持し來つて他に付與す。(豈に恁麼の事有らんや。金牛を謗すること莫くんば好し。喚んで飯桶と

僧堂を白
雲と云
ふとも
ふと云
どはれ
絶對上
の處を
雪裏に
へたる
て、金
和尙の
脚地を
指す

作し得てんや。若し是れ本分の衲僧ならば、這般の茶飯を喫せず。若し是れ金毛の獅子子ならば、(須らく是れ他格外にして、始めて得べし。他の具眼を許す。只だ恐らくは眼正しからざらんことを。)三千里外に誦訛を見ん。(半文錢に直らず。一場の遍逗。誦訛什麼の處にか在る。瞎漢。)

〔評〕白雲影裏、笑ひ呵々、長慶道く、齋に困つて慶讚すと。雪竇道く、兩手に持し來つて、他に付與す、且く道へ、只だ是れ他に與へて、喫飯せしむるか。爲當別に奇特有るか。若し箇裏に向つて、端的を知得せば、便ち是れ箇の金毛の獅子子ならん。若し是れ金毛の獅子子ならば、更に金牛の飯桶を將ち來りて、舞を作して大笑することとせす、直に三千里外に向つて、便ち他の敗缺の處を知らん。古人道く、鑿機先に在つて、一捏を消せず。所以に衲僧

家、尋常須らく是れ格外に向つて、用ひて始めて本分の宗師と稱することを得べし。若し只語言に據らば、未だ免れず遍返すること

第七十五則 烏白屈棒

垂示曰。靈鋒寶劍、常露現前。亦能殺人。亦能活人。在彼在此、同得同失。若要提持、一任提持。若要平展、一任平展。且道、不落賓主、不拘回互時如何。試舉看。

〔提持〕把定と云ふに同じ

垂示に曰く。靈鋒の寶劍、常露現前。亦能く人を殺し、亦能く人を活す。彼れに在り此れに在り、同得同失。若し提持せんと要せば、提持するに一任す、若し平展せんと要せば、平展するに一任す。

〔平展〕放と云ふに同じ

且く道へ、賓主に落ちず、回互に拘はらざる時如何、試みに舉看よ。

舉僧從定州和尚會裏來、到烏白、烏白問、定州法道何似這裏。言中有響、要辨淺深。僧曰、不別。死漢中有活底。一箇半箇。白曰、若不別、更轉彼中去。便打。灼然正。僧曰、棒頭有眼、不得草草打人。也是這作家始。白曰、今日打着一箇也、又打三下。說什麼一箇、僧便出去。元來是屋裏只是見。白曰、屈棒元來、有人喫在。啞子喫苦瓜。點得回來、僧轉身云、爭奈杓柄在和尚手裏。堪作何用。

り、直に
棒を行す
と見ゆる
も傳詳か
ならず。
〔今日一
箇を打
着〕打
甲斐のあ
るのに巡
り逢うた
と云ふ程
の意。
〔屈〕冤罪
のこと。
〔回〕與回
は貸の義
なり、即
ち貸與せ
んとすの
意。
〔消〕得恚
は恚の義
なり。

〔知る他阿誰か是れ君、阿誰か是れ臣。敢へて虎口に向つて身を横
ふ。忒然だ好悪を識らず。〕僧近前して、白の手中の棒を奪うて、白
を打つこと三下す。也た是れ一箇。作家の禪客にして始めて得ん。
賓主互換。縦奪時に臨む。白曰く、屈棒屈棒。〔點〕這の老漢、什麼
の死急をか着けたる。僧曰く、人の喫する有る在り。阿々。是れ幾
箇の杓柄か、却つて這の僧の手裏に在る。白曰く、草々に箇の漢を
打着す。〔兩邊に落ちず。知んぬ他は是れ阿誰ぞ。〕僧便ち禮拜す。〔危
に臨んで變ぜざるは、方さに是れ丈夫兒。〕白曰く、和尚却つて恚麼
に去るや。〔點〕僧大笑して出づ。〔作家の禪客、天然に在る有り。猛
虎須らく清風の隨ふことを得べし。方さに知る始めを盡し終りを盡
すことを。天下の人、摸索不着。〕白曰く、消得恚麼、消得恚麼。〔惜
しむ可し放過することを。何ぞ劈脊に便ち棒せざる。將に謂へり、

り是の如
きことな
用ひ得た
かとなり

走つて什麼の處にか到り去ると。)

〔評〕僧定州和尚の會裏より來つて、烏白に到る。白亦是れ作家。
諸人若し這裏に向つて、此の二人の一出一入を識得せば、千箇萬
箇、只だ是れ一箇。主と作ることも也た恚麼、賓と作ることも也た
恚麼、二人畢竟合して一家と成る。一期の勘辨、賓主問答、始終作
家。看よ烏白這の僧に問うて曰く、定州の法道、這裏に何似。僧便
ち曰く、別ならずと。當時若し是れ烏白にあらすんば、這の僧を奈
かんともし難からん。白曰く、若し別ならずんば、更に彼の中に轉じ
て去らんと云うて、便ち打つ。爭奈せん這の僧是れ作家の漢なる
ことを、便ち曰く、棒頭に眼有り、草々に人を打つことを得され
と。白一向に會を行じて曰く、今日一箇を打着すと云うて、又打つ
こと三下す。其の僧便ち出で去る。看よ他の兩箇、轉轉々地にして

俱に是れ作家にして、この一事を了することを。須らく縑素を分ち、休咎を別たんことを要す。この僧、出で去ると雖ども、この公案、却つて未だ了せざると在り。烏白始終、他の實處を驗して、他如何と看んことを要す。この僧却つて門を撐へ、戸を拄ふるに似たり、所以に未だ他を見得せず。烏白曰く、屈棒元來人の喫する有る在り。この僧、身を轉じて氣を吐くことを要して、却つて他と争はず、輕々に轉じて曰く、争奈せん杓柄、和尚の手裏に在ることを。烏白は是れ頂門に眼を具する底の宗師、敢て猛虎口裏に向つて、身を横へて曰く、汝若し要せば、山僧汝に回與せんと。この僧是れ箇の肘下に符有る底の漢、所謂義を見て爲さざるは勇無きなり、更に擬議せず近前して、烏白手中の棒を奪うて、白を打つこと三下す。白曰く、屈棒屈棒と。汝且く道へ、意作麼生、頭上に道ふ、屈棒

〔卓朔〕卓
は獨立の
貌、朔は
蘇也、朔
ち蘇生し
た活漢と
云ふこと

元來、人の喫する有る在り。この僧他を打つに到るに及んで、却つて道ふ、屈棒屈棒と。僧曰く、人の喫する有る在り。白曰く、草々に箇の漢を打着すと。頭上に道ふ、草々に一箇を打着すと。末後自ら棒を喫するに到つて、什麼としてか亦道ふ、草々に箇の漢を打着すと。當時若し是れこの僧、卓朔地なるにあらずんば、也た他を奈何ともせず、この僧便ち禮拜す。この僧の禮拜、最も毒なり、是れ好心にあらず、若し是れ烏白にあらずんば、也た他を識不破ならん。烏白曰く、却つて恁麼にし去ると。其の僧大笑して出づ。烏白曰く、消得恁麼、消得恁麼と。看よ他の作家の相見、始終賓主分明にして、斷じて能く續くことを、其の實は、也只だ是れ互換の機なり。他這裏に到りて、亦箇の互換の處有りと道はず。自らは是れ他の古人、情塵意想を絶して、彼此作家、亦得有り失有りと道はず。是れ一期の間の

あれども風外師は日輪と好説最も云へり。劫石劫は梵語と波時問詳と云ふ評唱に蔡州を打出すべし。打破す。打甲は死す。味と俗ふ。俗意。味と俗ふ。俗意。

碧巖録 第八卷

六六

草。雪竇忒然慈悲、尋常道ふ、蛇を呼ぶことは易く、蛇を遣ることは難し。如今箇の瓢子を將ちて、吹き來つて蛇を喚ぶことは即ち易く、遣らんと要する時即ち難し。一へに棒を將つて他に與ふることは却つて易く、復地の棒を奪ひて、遣り去ることは却つて難きに似たり。須らく是れ本分の手脚有りて、方に能く他を遣り得去るべし。烏白は是れ作家、蛇を呼ぶ底の手脚有り、亦蛇を遣る底の手脚有り。この僧、也た是れ瞌睡底にあらす。烏白問ふ、定州の法道、這裏と何似と、便ち是れ他を呼ぶ。烏白便ち打つ、是れ他を遣るなり。僧曰く、棒頭に眼有り、草々に人を打つことを得ざれと、却つてこの僧の處に轉在して、便ち是れ呼び來す。烏白曰く、汝若し要せば、山僧汝に回與せん。僧便ち近前して、棒を奪うて也た打つこと三下す、却つて是れ這の僧遣り去る。乃至這の僧、大笑して出

〔絲來り〕
線去る
トリする

づ。烏白曰く、消得恁麼、消得恁麼、此れ分明に是れ他を遣り得て恰好なり。看よ他の兩箇の機鋒互換、絲來り線去つて、打成一片、始終賓主分明なることを。有る時は主却つて賓と作り、有る時は賓却つて主と作る。雪竇也た讚歎し及ぼさず、所以に道ふ、互換の機人をして且く子細に看しむと。劫石固うし來るも、猶ほ壞す可し、謂はゆる此の劫石、長さ四十里、廣さ八萬四千由旬、厚さ八萬四千由旬、凡そ五百年に、乃ち天人有りて下り來りて、六銖の衣袖を以て、拂ふこと一下、又去りて五百年に至りて、又來つて此の如く拂ふ、此の石を拂ひ盡すを、乃ち一劫と爲す。之れを輕衣拂石劫と謂ふ。雪竇曰く、劫石固うし來るも、猶ほ壞す可し、石は堅固なりと雖も、尙ほ爾も消磨し盡すべし。此の二人の機鋒は、千古萬古更らに窮盡有ること無し。滄溟深き處も、立ろに乾かすべし、任ひ

第七十五則 烏白屈棒

六七

是れ滄溟、洪波浩渺、白浪滔天なるも、若し此の二人をして、内に
 向つて地に立たしめば、此の滄溟も、也た須らく乾竭すべし。雪竇
 此に到つて、一時に頌したる。末後に更に道ふ、烏臼老、烏臼老、
 幾何般ぞと。或は擒或は縦、或は殺或は活、畢竟是れ幾何般ぞ。他に
 杓柄を與ふ、太だ端無し、這箇の拄杖子、三世の諸佛も也た用ひ、
 歴代の祖師も也た用ひ、宗師家も也た用ひて、人の爲めに釘を抽き
 楔を抜き、粘を解き縛を去る、争でか輕易に人に分付し與ふること
 を得ん。雪竇の意、獨り用ひんことを要す。頼に這の僧當時、只
 だ他の爲めに平展するに値ふ、忽ち若し旱地に雷を起さば、看よ他
 如何か當抵せん。烏臼杓柄を過して、人に與へ去る、豈に是れ太だ
 端無きにあらざらんや。

第七十六則 丹霞喫飯了

垂示曰。細如米末、冷似冰霜。逼塞乾坤、離明絕暗。低々
 處、觀之有餘。高々處、平之不足。把住放行、總在這裏許。
 還有出身處也無。試舉看。

讀方 垂示に曰く。細なることは米末の如く、冷なることは冰霜に
 似たり。乾坤に逼塞して、明を離れ暗を絶す。低々たる處、之れを
 觀るに餘り有り、高々たる處、之れを平ぐるに足らず。把住放行、
 總に這の裏許に在り。還つて出身の處有りや也た無しや。試みに舉
 す看よ。

舉。丹霞問僧、甚處來。正是不可總沒來處。僧曰、

第七十六則、丹霞喫飯了

六八

〔長慶、保
福〕此二
人共に雪
峯の法嗣
なり。

碧巖錄 第八卷

と一般と。長慶保福に問ふ、飯を將て人に與へて喫せしむる、恩を報ずるに分有り、什麼としてか眼を具せざる。(也た只だ一半を道ひ得たり。通身是、遍身是。一刀兩段。一手擡一手擡。福曰く、施者受者、二り俱に瞎漢。(令に據つて行ず。一句に道ひ盡す。其の人に遇ふこと罕なり。長慶曰く、其の機を盡し來らんに、還つて瞎と成らんや否や。(甚の好悪をか識らん。猶ほ自ら肯はず。什麼の腕をか討ねん。福曰く、我を瞎すと道ひ得てんや。(兩箇俱に是れ草裏の漢、龍頭蛇尾。當時他の其の機を盡し來らんに、還つて瞎と成らんや否やと道ふことを待つて、只だ他に向つて瞎と道はん。也た只だ一半を道ひ得たり。一等に是れ作家、什麼としてか、前村に構らず、後店に迷らざる。)

【評】 鄧州丹霞の天然禪師は、何許の人と云ふことを知らず。初め

〔幞頭〕黒
羅三尺を
以て後に
向けて髪
を裏む俗
之を幞頭
に幞頭と
云ふ巾の
ち頭也の
こと也。捧
り(托)捧
な

儒學を習ひ、將に長安に入て舉に應ぜんとす。方に逆旅に宿す、忽ち白光室に滿つと夢む、占者曰く、解空の祥なりと。偶々一禪客有り、問うて曰く、仁者何くにか往く。曰く、選官し去る。禪客曰く、選官は何ぞ選佛に如かん。霞曰く、選佛當に何れの所にか往く。禪客曰く、今江西に馬大師出世す、是れ選佛の場なり、仁者往くべしと。遂に直に江西に造る、才かに馬大師を見て、兩手を以て幞頭脚(脚一に額に作る)を托ぐ。馬大師顧視して曰く、吾れ汝が師に非ず。南嶽石頭の處に去れ。遽かに南嶽に抵つて、還つて前意を以て之れに投ず。石頭曰く、槽廠に着き去れ。師禮謝して、行者堂に入る。衆に隨つて作務すること凡そ三年、石頭一日衆に告げて曰く、來日佛殿前の草を剉らん。來日に至つて、大衆各々蹶蹴を備へて草を剉る。丹霞獨り盆を以て、水を盛つて淨頭して、師の前に於て

第七十六則 丹霞喫飯了

〔槽廠〕槽
は馬を養
ふ處の廠
壁なきを
云ふは、
にふは、
房の意な
りと。

碧巖錄 第八卷

跪膝す。石頭見て之れを笑ふ、便ち爲めに剃髮し、又爲めに説戒す。
丹霞耳を掩うて出づ。便ち江西に往いて再び馬祖に謁す、未だ參禮
せざるに、便ち僧堂の内に去つて、聖僧の頸に騎て坐す。時に大衆驚
愕して、急に馬祖に報す。祖躬ら堂に入つて之れを視て曰く、我が
子天然と。霞便ち下つて、禮拜して曰く、師の法號を賜ふことを謝
す、因て天然と名く。他の古人、天然是の如く顛脫なり、所謂選官
は選佛に如かず、傳燈錄の中に其の語句を載す。直に是れ壁立千
仞、句々人の爲めに釘を抽き、楔を抜く底の手脚有り、這の僧に問
ふに似たり、道く、什麼の處より來る。僧曰く、山下より來ると。
這の僧却つて來處を通ぜず、一へに眼を具して、倒まに去つて主家
を勘するが如くに相似たり。當時若し是れ丹霞にあらずんば、也た収
拾を爲し難からん。丹霞却つて曰く、喫飯し了るや也た未だしや。

〔眨々〕眼
の動く貌

頭邊は總て未だ見得せず、此れは是れ第二回他を勘す。僧曰く、喫
飯し了れり、憍懂の漢、元來會せず。霞曰く、飯を將つて汝に與へ
て喫せしむる底の人、還つて眼を具するや。僧無語。丹霞の意に道
く、汝這般の漢に飯を與へて喫せしめば、什麼を作すにか堪へん。
這の僧若し是れ箇の漢ならば、試に一割を與へて、他如何と看ん。
然かも是の如くなりと雖ども、丹霞也未だ汝を放さざること有り。
這の僧便ち眼眨々地にして無語。保福長慶、同じく雪峰の會下に在
りて、常に古人の公案を擧して商量す。長慶保福に問ふ、飯を將
ちて人に與へて喫せしむ、恩を報するに分有り、什麼としてか眼を
具せざると、必らずしも盡く公案中の事を問はず。大綱此の語を借
つて、話頭を作して、他の諦當の處を驗せんことを要す。保福曰
く、施者受者、二り俱に瞎漢と、快なる哉。這裏に到つて、只だ當

第七十六則 丹霞喫飯了

機の事を論ず、家裏出身の路有り。長慶曰く、其機を盡し來らん、還つて瞎と成らんや。保福曰く、我れを瞎すと道ひ得てんや。保福の意に謂はく、我れ怎麼に眼を具して、汝が與めに道ひ了れり、還つて我れ瞎すと道ひ得てんやと。然かも是の如くなりと雖ども、半分合半開、當時若し是れ山僧ならば、他の其の機を盡し來るに、還つて瞎と成るや否やと道はんを等て、只だ他に向つて瞎と道はん。可惜許、保福當時若し這箇の瞎の字を下し得ば、雪竇許多の葛藤を免れ得ん、雪竇亦只だ此の意を用ひて頌す。

頌。盡機不成瞎。只道得一半。也要按牛頭喫草。
失錢遭罪。半河南半河北。殊不知傷鋒犯手。 四七二二三諸祖師。
有條攀先聖。帶累先聖。還我拄杖來。帶累山

僧不出過咎深。不可煞深。天下衲僧跳無處尋。
在汝脚跟下。摸頭不得。且道深多少。 天下衲僧。一坑埋却。還有活
 着。天上人間同陸沈。
天下衲僧。放過一着。着天着天。底入麼。放過一着。着天着天。

〔牛頭昔或云
 人神供へ
 物を祭る
 を見ける
 傍へ牛の
 頭丈往の
 持て其の
 口草を食
 當てて食
 はせて食
 人たんと
 でたがそ

讀方 機を盡して瞎と成らず、(只だ一半を道ひ得たり。也た他を驗過せんことを要す。言猶ほ耳に在り。)牛頭を按じて草を喫せしむ。
(失錢遭罪。半は河南、半は河北。殊に知らず鋒を傷り手を犯すとを。)
 四七二二三の諸祖師。(條有れば條を攀づ。先聖を帶累す。唯只一人を帶累するのみに非らず。)寶器持し來つて、過咎と成る。(盡大地の帶累するのみに非らず。)我に拄杖を還し來れ。山僧を帶累して、人、手を換へて胸を槌つ。可煞だ深し。天下の衲僧跳不出也。也た出頭不得ならん。過咎深し、(汝が脚跟下に在り。摸且く道へ深きこと多少ぞ。)尋ぬるに處無し。(汝が脚跟下に在り。摸索不着。)天上人間同じく陸沈す。(天下の衲僧、一坑に埋却す。還つ

これ神も笑ふ
供物を食ふ
は物とてあ
らうと云笑
つたと大
ふ話論に
智度論
有慶保
て長慶
福の問
に譬ふ

碧巖錄 第八卷

て活底の人有りや。一着を放過す。蒼天蒼天。

【評】機を盡して瞎と成らず。長慶曰く、其の機を盡し來らんには、

還つて瞎と成らんや否や。保福曰く、我を瞎すと道ひ得てんやと。

一へに牛頭を按じて、草を喫せしむるに似たり、須らく是れ他の自

ら喫せんを等つて、始めて得べし。那裏にか他の頭を按じて喫せし

む。雪竇恁麼に頌す、自然に丹霞の意を見得す。四七二三諸祖師、

寶器を持し來つて、過咎と成る、唯只長慶を帶累するのみにあら

ず、乃至西天の二十八祖、此土の六祖、一時に埋却す。釋迦老子、

四十九年、一大藏教を説いて、最後に唯だ這箇の寶器を傳ふ。永嘉

道く、是れ形を標して、靡しく事禪するにあらず、如來の寶杖、親

しく縦跡と。若し保福の見解を作さば、寶器持し來るも、都べて過

咎と成る。過咎深し、尋ぬるに處無し、這箇汝が與めに説くこと得

ず、但だ去つて靜坐して、他の句中に向つて點檢して看よ。既に是
れ咎深し、什麼に因つてか、却つて尋ぬるに處無き。此れ小過に非
らず、祖師の大事を將つて、一齊に陸地上に於て、平沈却す。所以
に雪竇道く、天上人間同じく陸沈すと。

第七十七則 雲門餠餅

垂示曰。向上轉去、可以穿天下人鼻孔、似鶻捉鳩。向下
轉去、自己鼻孔、在別人手裏、如龜藏殼。箇中忽有箇出
來、道本來無、向上向下、用轉作什麼、只向伊道、我也知
汝向鬼窟裏作活計。且道、作麼生辨箇緇素。良久曰、有
條攀條、無條攀例。試舉看。

離、見也麼。已在言前。開也。餠餅壑來、猶不住、
將木棹子、換却。汝眼晴了也。至今天下、有諸訛。畫箇圓相、曰、莫是
句、有甚了期。大地茫茫、愁殺人。便打。

〔縫〕縫披
離〕縫披
等〕縫披
の〕縫披
披〕縫披
其〕縫披
の〕縫披
爲〕縫披
マ〕縫披
ラ〕縫披
に〕縫披
な〕縫披
つ〕縫披
た〕縫披
〔木棹子〕

【讀方】超談の禪客、問ひ偏へに多し、(箇々出で來つて、便ち這般の
見解を作す。麻の如く粟に似たり。)縫披披離たり、見るや也た麼
や。(已に言前に在り。開也。自屎臭を覺えず。)餠餅壑し來れども、
猶ほ住まず、(木棹子を將つて、汝が眼晴と換却し了れり。)今に至
るまで、天下諸訛有り。(箇の圓相を畫いて曰く、是れ恁麼に會する
こと莫しや。人の言句を咬まば、甚の了期か有らん。大地茫茫とし
て、人を愁殺す。便ち打つ。)

【評】超談の禪客、問ひ偏へに多し、此の語禪和家、偏へに問ふを

珠數を作
るに用ふ
る木の實
なり。

〔欄〕遮な
り。〔聖〕塞な
り。〔聖〕充満
せる貌。

愛す。見すや雲門道く、汝諸人、横に拄杖を擔うて、我れ參禪學
道すと道うて、便ち箇の超佛越祖の道理を覺む。我れ且く汝に問は
ん、十二時中、行住坐臥、屙屎放尿、茅坑裏の蟲子、市肆買賣、羊
肉案頭に至つて、還つて超佛越祖底の道理有りや。道ひ得る底は出
で來れ、若し無くんば、我が東行西行を妨ぐるに莫れと、便ち下
座。有る者は更に好惡を識らず、圓相を作して、土上に泥を加へ、
枷を添へ鎖を帶ぶ。縫披披離たり、見るや也た麼や、他問を致す
處、大小大の縫披有り、雲門他の問處披離たるを見て、所以に餠餅
を將て、欄縫に塞定す。この僧猶ほ自ら肯うて住まず、却つて更に
問ふ。是の故に雲竇道く、餠餅壑し來れども、猶ほ住まず、今に
至つて、天下諸訛有り、如今の禪和子、只管に餠餅上に去つて解
會す、然らざれば超佛越祖の處に去つて、道理を作す。既に此の兩

欲す、鉢を携へ、飛遠嶺をへ、出で石頭に、脚着し痛て、流血、楚、忽、省、是、曰、痛、非、身、有、痛、何、より、来、る、と、何、に、即、ち、回、る、と、峯、に、即、ち、回、る、と、と、徳、山、の、棒、に、入、る、の、門、に、入、る、の、便、る、の、

碧巖録 第八卷

れば、千處萬處一時に透る、只だ一窠一窟を守ること莫れ。一切處
都て是れ觀音入理の門、古人亦聞聲悟道、見色明心有り。若し一
人悟り去ることは、則ち故らに是、甚に因つてか十六開士、同時に
悟り去る。是の故に古人、同修同證、同悟同解す。雪竇他の教意を
拈じて、人をして妙觸の處に去つて會取せしむ。他の教眼を出して
頌し得て、人の教網の裏に去つて、籠罩して半醉半醒なることを免
れん、人をして直下に灑々落落たらしめんことを要す。

頌。了事衲僧消一箇。現有金剛圈。朝打三千、暮打八百。
長連床上展脚臥。果然是箇瞌睡。夢中曾說、

悟圓通。早是瞌睡更說夢。却許香水洗來、薰面唾。

咄。土上加泥。又上。重。莫下來。淨地上。上。一。

ち棒、即無、生忍、妙、觸、宣、明、了、事、心、事、了、事、心、事、既、經、一、日、人、真、源、に、歸、す、れ、ば、空、十、方、虛、空、消、殞、す、と、僧、堂、に、坐、衆、僧、の、處、禪、單、と、只、だ、單、と、(古人)夾

【讀方】 了事の衲僧、一箇を消す、(現に一箇有り。朝打三千、暮打八百。金剛圈を跳出す。一箇も也消得せず。) 長連床上、脚を展べて臥す。(果然として是れ箇の瞌睡の漢。劫を論じて禪を論ぜず。) 夢中曾て説く、圓通を悟ると。(早く是れ瞌睡して、更に夢を説く。却つて汝に許す夢に見ることを。寐悟して什麼をか作さん。) 香水洗ひ來るも、薰面に唾せん。(咄。土上に泥を加ふ又一重。淨地上に來つて扇すること莫れ。)

【評】 了事の衲僧、一箇を消すと、且く道へ、箇の什麼の事をか了得する。作家の禪客、聊か舉着するを聞いて、剔起して便ち行く、恁麼の衲僧に似たる、只だ一箇を消得ず、何ぞ用ひん、群を成し隊を成すことを。長連床上に、脚を展べて臥す。古人道く、明々として悟法無し、悟了せば却つて人を迷はす、長く兩脚を舒べて睡

可放過。好打拄杖未。
到折因什麼便休去。

〔投子〕舒州大猷禪師。下世達磨。孫實頭。法一。實頭。辯。一切。聲。梵。天。所。問。經。法。華。經。不。輕。品。等。出。

【讀方】 舉す。僧投子に問ふ、一切の聲は是れ佛聲と、是なりや否や。
(也た虎鬚を持つることを解す。青天に霹靂を轟かす。自屎臭を覺えず。) 投子曰く、是。(一船の人を賺殺す。身を賣つて汝に與へ了れり。一邊に拈放す。是れ什麼の心行ぞ。) 僧曰く、和尚尿沸碗鳴聲すること莫れ。(只だ錐頭の利を見て、鑿頭の方を見ず。什麼と道ふぞ。果然として敗缺を納る。) 投子便ち打つ。(着。好打、放過せば則ち不可。) 又問ふ、疊言及び細語、皆第一義に歸すと、是なりや否や。
(第二回虎鬚を持つ。賊を抱き屈を叫んで、什麼とか作さん。東西南北、猶ほ影響の在る有り。) 投子曰はく、是。(又是れ身を賣つて汝に與へ了れり。陷虎の機也。是れ什麼の心行ぞ。) 僧曰く、和尚を喚ん

〔尿沸碗〕 鳴聲。尾竅。尻。肛。門。の。沸。音。は。フツ音。の。ある。碗。の。鳴。聲。は。塗。物。の。熱。湯。を。注。い。だ。す。時。音。の。す。意。を。知。る。べし。
〔合下〕 直下。に。同。じ。
〔後語〕 再抄のこと。

で、一頭の驢と作し得てんや。(只だ錐頭の利を見て、鑿頭の方を見ず。逆水の波有りと雖ども、只だ是れ頭上に角無し。血を含んで人に喫ぐ) 投子便ち打つ。(着。放過すべからず。好打、拄杖未だ折るに到らず、什麼に因つてか便ち休し去る。)

【評】 投子は朴實頭にして、逸群の辯を得たり、凡そ問を致すこと有りて、口を開けば便ち膽を見る、餘力を費さず、便ち他の舌頭を坐斷す。謂つべし籌を帷幄の中に運らして、勝を千里の外に決すと。この僧聲色佛法の見解を將ちて、他の額頭上に貼在して、人に逢うて便ち問ふ。投子は作家、來風深く辨ず。この僧投子の實頭なることを知つて、合下に箇の圈續を做して、投子をして入り來らしむ。所以に後語有り。投子却つて陷虎の機をして、他の後語を釣り出し來る。この僧、他の答處を接して道ふ、和尚尿沸碗鳴聲すること莫れ

第七十九則 投子尿沸碗

〔咬猪狗〕
猛虎の手
脚あるこ
とを云ふ

碧巖録 第八卷

六六

と。果然として一釣に便ち上る、若し是れ別人ならば、則ちこの僧を奈何ともせず。投子は具眼、後に随つて便ち打つ、咬猪狗底の手脚なり、須らく作家に還して、始めて得べし。左轉も也た他に随つて阿鞞々地、右轉も也た他に随つて阿鞞々地。この僧既に是れ箇の圈續子を做して、來つて虎鬚を持でんことを要す、殊に知らず、投子更に他の圈續頭上に在ることを。投子便ち打つ。この僧可惜許、頭有りて尾無し。當時他の棒を拈せんことを等つて、便ち與めに禪床を掀倒せば、直僂ひ投子全機なりとも、也た須らく倒退三千里すべし。又問ふ、龜言及び細語、皆第一義に歸すと、是なりや否や。投子亦曰く、是と。一へに前頭の語に似て異なること無し。僧曰はく和尚を喚んで、一頭の驢と作し得てんや。投子又打つ。この僧然も窠窟を作すと雖ども、也た妨けず奇特なることを。若し是れ曲糸

〔擲却〕
本には返
却に作る

木床 上の老漢、頂門に眼無くんば、也た他を折挫し難からん。投子轉身の處有り、この僧既に箇の道理を做して、他の行市を攪かんことを要す。到り了れば、舊に依て投子老漢を奈何ともせず。見ずや巖頭道く、若し戰を論せば、箇々轉處に立在すと。投子放去は太だ遅く、收來は太だ急なり。この僧當時若し身を轉じ、氣を吐くことを解せば、豈に箇の口、血盆に似たる底の漢と作り得ざらんや。衲僧家、一做されば、二休せず、この僧既に擲却すること能はず。投子に鼻孔を穿了せらる。

頌。投子投子、灼然天下無這實頭。機輪無阻。
奈何他處、放一得一、換却汝眼睛。什同彼同此。
也。有。些。子。麼。處。見。投。子。同。彼。同。此。來。也。麼。也。
喫棒、不恁麼來也。喫可憐無限弄潮人。
棒。閣梨替他便打。可憐無限弄潮人。
箇林中放出這一

第七十九則 投子、沸碗

六九

兩箇漢。天下畢竟還落潮中死。可惜許。爭奈出這圈
人。忽然活。禪床震動。驚殺山僧。百川倒流。開漚々。
說。徒勞也。思山僧不取開口。投子老漢也。須是拗折拄杖始得。

〔阻無し〕
阻は阻礙の義なり。故に自由自在の意なり。

〔讀方〕 投子投子、灼然。天下に這の實頭の老漢無し。人家の男女を教壞す。機輪阻無し。什麼の他を奈何ともし難き處か有らん。也た些子有り。一を放ちて二を得たり。汝が眼睛を換却す。什麼の處にか投子を見ん。彼れに同じく此れに同じ。恁麼にし來るも也棒を喫し、不恁麼にし來るも也た棒を喫す。闍梨他に替るも便ち打たん。憐む可し限り無き潮を弄するの人、叢林中一箇半箇を放出す。這の兩箇の漢を放出す。天下の衲僧、恁麼にし去る。畢竟還つて潮中に落ちて死す。可惜許。爭奈せん這の圈縲を出づることを得ず。

〔漚々〕水の流れる音の形容なり。

〔古人〕雪寶なり。

愁人は愁人に向つて説くこと莫れ。忽然として活せば、禪床震動せん。山僧を驚殺して、也た倒退三千里ならしむ。百川倒まに流れて、開漚々たらん。嶮。徒らに佇思するに勞す。山僧敢へて口を開かず。投子老漢も、也た須らく是れ拄杖を拗折して、始めて得べし。
〔評〕 投子投子、機輪阻てなし。投子尋常道ふ、汝總に道ふ、投子實頭なりと、忽然として山を下ること三步せん。人有り汝に問うて如何なるか是れ投子實頭の處と道は、汝作麼生が抵對せん。古人道く、機輪轉する處、作者猶ほ迷ふと。他機輪轉々地にして、全く阻無し、所以に雪寶道く、一を放ちて二を得たりと。見ずや僧問ふ、如何なるか是れ佛。投子曰はく、佛。又問ふ、如何なるか是れ道。投子曰はく、道。又問ふ、如何なるか是れ禪。投子曰はく、禪。又

問ふ、月未だ圓かならざる時如何。投子曰はく、三箇四箇を吞却す。圓かなる後ち如何。七箇八箇を吐却す。投子人を接するに、常に此の機を用ふ、この僧に答ふるに、只だ是れ一箇の是の字。この僧兩回打せらる。所以に雪竇道はく、彼れに同じく此れに同じと。四句、一時に投子を頌し了れり。末後にこの僧を頌して道はく、憐れむべし限り無き、潮を弄する人と。この僧、敢へて旗を擡き鼓を奪うて道ふ、和尚尿沸碗、鳴聲すること莫れと。又道はく、和尚を喚んで、一頭の驢と作し得てんやと、此れ便ち是れ潮を弄する處なり。この僧伎倆を盡して、依前として投子の句中に死在す。投子便ち打つ、此の僧便ち是れ畢竟還つて、潮中に落ちて死す。雪竇この僧を出して曰はく、忽然として活して、便ち與めに禪定を掀倒せんに、投子も也た須らく倒退三千里すべし。直に得ん百川倒流して、

〔岌嶮〕岌
は高山の
こと、岌
は崖のこ
と也、
〔陡暗〕陡
峻、立なり
忽ち暗黒
となり本
に陡を陟
誤りなる

〔孩子〕赤
子の、と
〔六識〕眼
耳鼻舌身

開瀝々たることを。唯だ禪床の震動するのみに非らず、亦乃ち山川岌嶮として、天地陡暗ならん。苟し或は箇々此の如くならば、山僧且く退鼓を打たん、諸人什麼の處に向つてか、安身立命せん。

第八十則 趙州急水上

舉。僧問趙州、初生孩子、還具六識也無。閃電之機。說什麼。趙州曰、急水上打毬子。不及也。俊鶴趨初生孩兒子。趙州曰、急水上打毬子。意旨如何。過。僧復問投子、急水上打毬子。意旨如何。也是作家同驗。子曰、念々不停流。打葛。還會麼。過也。藤漢。

讀方 舉す。僧趙州に問ふ、初生の孩子、還つて六識を具するや也。た無しや。(閃電の機。什麼の初生の孩兒子とか説かん。)趙州曰く、急水上に毬子を打す。(過てり。俊鶴趨へども及はず。也た驗過せん

第八十則 趙州急水上

意の六根
が香味觸法
の六境に
對して識
別するの
心的作用
を云ふ。

〔古人道〕
華嚴經の
世間品の
文也。
〔八識〕
轉じて云
々々第八
阿頼耶識
を轉じて
大圓鏡智
を末那識
七轉識と
す。

平等性智
を得て第
六意識を
轉じて妙
觀智を第
五轉智と
す。得る
智を轉識
と云ふ。
〔根塵識〕
六根と六
境との
十八界な
り。〔勝義根〕
根に二種
ありて、
一を勝義

碧巖錄 第八卷

ことを要す。僧復投子に問ふ、急水上に毬子を打すと云ふ、意旨如何。(也た是れ作家、同じく驗過す。還つて會すや。過てり。)子曰く、念々不停流。(葛藤を打する漢。)

【評】此の六識、教家に立て、正本と爲す、山河大地、日月星辰、其れに因つて生ずる所以なり、來る時に先鋒と爲り、去る時は殿後となる。古人道く、三界唯心、萬法唯識と。若し佛地を證すれば、八識を以て轉じて四智と爲す、教家に之れを名を改めて、體を改めずと謂ふ。根塵識是れ三つ、前塵は元分別を會せず、勝義根、能く識を發生し、識能く色の分別を顯はす、即ち是れ第六の意識なり。第七識の末那識、能く去つて世間一切の影事を執持して、人をして煩惱して、自由自在なることを得ざらしむ、皆な是れ第七識なり。第八識に到つて、亦之れを阿頼耶識と謂ふ、亦之れを含藏識と謂ふ、一切

善惡の種子を含藏す。この僧教意を知りて、故らに將ち來つて趙州に問ふ、道く、初生の孩兒、還つて六識を具するや也た無しやと。初生の孩兒、六識を具して、眼能く見、耳能く聞くと雖ども、然も未だ會つて六塵を分別せず、好惡長短、是非得失、他恁麼の時總に知らず。學道の人、復嬰孩の如くならんことを要す。榮辱功名、逆情順境、都て他を動ずることを得ず。眼色を見て盲と等しく、耳聲を聞いて聾と等し、痴の如く兀に似たり、其の心動せざること、須彌山の如し。這箇は是れ衲僧家、眞實得力の處なり。古人道く、衲被蒙頭萬事休す、此の時山僧、都て不會と。若し能く是の如くならば、方に少分の相應有らん。然も此の如しと雖ども、爭奈せん一點も也た他を瞞し得ざることを。山は舊に依つて是れ山、水は舊に依つて是れ水、造作無く、緣慮無し、日月の太虛を運つて、未だ

第八十則 趙州急水上

〔又道ふ〕
 〔我〕日月
 〔古人〕尚
 〔石〕頭和尚
 〔草〕庵の歌
 〔義〕根と勝
 〔相〕しては
 〔根〕と扶塵
 〔一〕根と云
 〔根〕と扶塵

紫塞野人
 雪子の吟
 〔又〕日龍
 〔牙〕居遁の
 〔教〕中道
 華嚴經十
 地品に曰
 地此菩薩
 一切の功
 用を捨功
 用の無功
 得の道功
 意業の念
 務皆息
 〔即〕住報
 〔心〕佛心
 〔槃〕心向

碧巖錄 第八卷

嘗て暫くも止まらざるが如し。亦我れ許多の名相有りと道はず、天の普く蓋ふが如く、地の普く撃ぐるに似たり。無心なるが爲めの故に、所以に萬物を長養す。亦我れ許多の功行有りと道はず、天地無心なるが爲めの故に、所以に長久なり。若し有心ならば、則ち限齊有らん。得道の人も、亦復是の如し、無功用の中に於て、功用を施す、一切の違情順境、皆慈心を以て攝受す。這裏に到りて、古人尚ほ自ら呵責して道ふ、了々々の時、了すべき無く、玄々々の處、直に須らく呵すべしと。又道はく、事々通じ、物々明らかなり、達者は之れを聞いて、暗裏に驚くと。又曰はく、聖に入り凡を超えて、聲を作さず、臥龍長く怖る、碧潭の清きことを、人生若し長く此の如きことを得ば、大地那ぞ能く一名を留めんと。然も恁麼なりと雖ども更に須らく窠窟を跳出して、始めて得べし。豈に見ずや教中に

道はく、第八不動地の菩薩、無功用の智を以て、一微塵の中に於て、大法輪を轉ず、一切時の中、行住坐臥に於て、得失に拘はらず、任運に薩婆若海に流入す。衲僧家、這裏に到つて、亦執着すべからず、但だ時に隨つて自在なり。茶に遇うては茶を喫し、飯に遇うては飯を喫す、這箇向上の事、箇の定の字を着くことも也た得ず、箇の不定の字を着くことも也た得ず。石室の善道和尚、衆に示して曰く、汝見すや、小兒出胎の時、何ぞ曾て我れ看教を會すと道はん、恁麼の時に當つて、亦有佛性の義、無佛性の義と云ふことを知らず、長大するに至るに及んで、便ち種々の知解を學んで、出で來つて便ち道ふ、我れ能くし我れ解すと、是れ客塵煩惱なることを知らず。十六觀行の中、嬰兒行を最と爲す、哆々嘲々の時を、學道の人の、分別取舍の心を離るゝに喩ふ、故に嬰兒を讚歎して、況喩

ことを。投子恁麼に答ふ、謂つ可し深く來風を辨すと。雪竇の頌に曰く、

頌。六識無功、伸ニ一問。有レ眼如レ盲、有レ耳如レ聾。明鏡作レ家、曾共辨ニ來端。何レ必也、要レ辨ニ箇。茫茫急水、打毬子。始レ終一貫。過落處、不レ停、誰解看。看レ即瞎。過也。

〔十八上〕又十義、上は回又、は即ち十、か即ち十、八回又、十八度、十八、説、あ、悟、悟、十八、其、小、大、悟、悟、其、數、を、知、如、知、き、は、自、在、を、云、ふ、も、の、に、し、て、決、し、て、蓋、し、そ、の、意、か、入、合

【讀方】六識無功、一問を伸ぶ、(眼有れども盲の如く、耳有れども聾の如く、明鏡臺に當り、明珠掌に在り。一句に道盡す)作家曾て共に、來端を辨す。(何ぞ必とせん。也た箇の縞素を辨せんことを要す。唯證して乃ち知る。)茫茫たる急水に、毬子を打す、(始終一貫。過てり。什麼と道ふぞ。)落處停まらず、誰れか看ることを解せん。(看ば即ち瞎せん。過てり。灘下に接取せよ。)

〔評〕六識無功、一問を伸ぶ、古人の學道、養うて這裏に到る、之れを無功の功と謂ふ、嬰兒と一般なり。眼耳鼻舌身意有りと雖ども、而も六塵を分別すること能はず、蓋し無功用なればなり。既に這般の田地に到つて、便乃ち龍を降し虎を伏し、坐脱立亡す。如今の人は、但だ目前の萬境を將つて、一時に歇却す、何ぞ必らずしも八地以上にして、方に乃ち是の如くならん。然も無功の處なりと雖ども、舊に依つて山は是れ山、水は是れ水。雪竇前面に頌して曰く、

活中に眼有り、還つて死に同じ、藥忌何ぞ須ひん、作家を鑒みること。蓋し趙州投子、是れ作家なるが爲めに、故に云ふ、作家曾て共に、來端を辨す、茫茫たる急水に、毬子を打すと。投子道く、念々不停流、諸人還つて落處を知るや。雪竇末後に、人をして自ら眼を着けて看しむ。是の故に曰く、落處停まらず、誰か看ることを解せ

法輪を三轉
葉を於火神
堂に於て放
威光を彼の
火龍を滅毒
一火時に四洞
然熾盛に寂
有所坐唯所
靜光としの
火つ火を龍
見已佛所
漸向佛所
踊便向佛所

碧巖錄 第八卷

んと。此れは是れ雪寶の活句、且く道へ、什麼の處にか落在する。

佛果圓悟禪師碧巖錄卷之八 終

佛鉢中に入る云々と。虎を降すは嚴隊尊者の如き是れなり。

佛果圓悟禪師碧巖錄卷之九

第八十一則 藥山塵中塵

〔旗を擡
云々〕
宗師家大
活現成の
略を云

垂示曰。擡旗奪鼓。千聖莫窮。坐斷諸訛。萬機不到。不是神通妙用。亦非本體如然。且道。憑箇什麼。得恁麼奇特。

〔讀方〕 垂示に曰く。旗を擡き鼓を奪ふ、千聖も窮むること莫し。諸訛を坐斷して、萬機到らず。是れ神通妙用にあらず、亦本體如然にあらず。且く道へ、箇の什麼に憑つてか、恁麼に奇特なることを得たる。

舉。僧問。藥山、平田、淺草、麀鹿、成群、如何射得塵中塵。

把髻投衛。擊頭帶。山曰。看箭。就身打劫。下坡不走。

快便難 僧放身便倒。灼然不同。一死更。山曰侍者

拖出這死漢。據令而行。不勞再勤。僧便走。棺木裡

中得活。猶山曰弄泥團漢。有什麼限。可憐許放過。

上加雪竇拈曰。三步雖活。五步須死。一手擲。直饒

走百步。也須喪身失命。復云看箭。且道。雪竇意。落在什麼處。

若是同死。同生。藥山直得。目瞪口呿。一向似無孔鐵鎚。堪作

用何。

讀方 舉。僧藥山に問ふ、平田の淺草、塵鹿群を成す、如何か塵

中の塵を射得せん。(髻)を把て衝に投ず。頭を撃け角を帶して出で

来る。腦後に箭を抜く。山曰く、箭を看よ。(就身打劫。下坡に走ら

ざれば快便逢ひ難し。着)僧身を放つて便ち倒る。(灼然として同

〔藥山〕禮
州藥山の
惟儼禪師の
頭禪石磨
九世の法

孫。鹿の
〔塵〕鹿の
最も大なる
て、多に引
の、子をと
の、連れか
歩くと把
て、髻を把
は、戦を脱
いて、胃を
衛は、官衛
な、罪人即
自、首すの
如、きを云

じからず。一死更に再活せず。精魂を弄するの漢。山曰く、侍者這
の死漢を拖き出せ。令に據つて行す。再勤するを勞せず、前箭は猶
ほ軽く、後箭は深し。僧便ち走る。(棺木裡に瞠眼す。死中に活を得
たり。猶ほ氣息の在る有り。)山曰く、泥團を弄するの漢、什麼の限
りか有らん。(可惜許放過することを。令に據つて行す。雪上に霜を
加ふ。)雪竇拈じし曰く、三步には活すと雖ども、五歩には須らく死
すべし。(一手擲一手擲。直饒ひ走ること百歩するも、也た須らく喪
身失命すべし。復云く箭を看よ。且く道へ、雪竇の意、什麼の處に
か落在する。若し是れ同死同生せば、藥山直に得たり、目瞪し口呿
すること。一向に無孔の鐵鎚に似ば、何の用をか作すに堪へん。)
【評】この公案洞下に之れを借事問と謂ひ、亦之れを辨主問と謂ふ、
用ひて當機を明す。鹿と塵とは、尋常射易し、唯だ塵中の塵のみ有

〔弓弦上〕
一本に弓
箭上とあ

つて、是れ鹿中の王なり。最も是れ射難し。此の麋鹿、常に崖石の上うへに於て、其の角を利とぐ、鋒銳ほうえいの顛利てんりなるが如し。身を以て群鹿ぐんろくを護惜ごしやくす、虎も亦近傍またきんぼうすること能はず。この僧亦惺々せいせいなるに似たり、引き來りて藥山やくざんに問ふ、用ゐて第一機だいいつきを明かす。山曰く、箭やを看みよと、作家さくけの宗師しゅうし、妨さまたけず奇特きせきなることを。擊石火げきせきくわの如く、閃電光せんでんくわうに似たり。豈あに見ずや、三平さんぺい初め石鞮せつきょうに參まず、鞮きょうわづ才さいかに來るを見て、便すなち弓を彎ひく勢いきほひを作して曰く、箭やを看みよ。三平さんぺい胸むねを撥開はつかいして曰く、此れは是れ殺人箭きつじんせんか活人箭くわつじんせんか。鞮きょう、弓弦きうげんを彈たんすること三下さんげ。三平さんぺい便べんち禮拜らいはいす。鞮きょう曰く、三十年、一張いちちやうの弓、兩隻りやうせきの箭や、今日こんにち只ただ半箇はんこの聖人せいじんを射得しやうとくしたり、と云うて便すなち弓箭きうせんを拗折えうせつす。三平さんぺい後に大顛だいてんに舉こ似じす。顛曰く、既すでに是れ活人箭くわつじんせん、什麼なんとしてか弓弦きうげん上じやうに向つて辨べんず。三平さんぺい無語むご。顛曰く、三十年後、人の此この話を舉こ似じせんことを要えう

誤り、蓋し
〔法燈〕清涼の泰欽
法眼文益嗣
禪師に嗣

〔梁〕射槩
と云うて
的を懸く
ふる屏びんを云

すとも、也なた得難えがたし。法燈ほふとう頌じゆ有り曰く、古いにしへ石鞮せききょう師しあり、弓矢きうしを架かして坐ざす、かくの如ごとくすること三十年、知音ちいん一箇いつこも無し、三平さんぺい的に中ちゆうり來きたる、父子ふし相投あひあ和わす、子細しさいに返かへつて思量しりやうすれば、元伊もとがれ是れ槩がいを射いると。石鞮せききょうの作略さくやく、藥山やくざんと一般いつぱんなり、三平さんぺい頂門ていもんに眼まなこを具ぐして、一いつ句下くかに向つて、便すなち的に中ちゆうつ、一ひとへに藥山やくざんの箭やを看みよと道みちふに似にたり。其その僧便そうすなち塵ちんと作りて、身みを放はなつて倒たふる、這この僧也そうまた作家さくけに似にたり、只ただ是れ頭有とうあつて尾無びなし。既すでに圈績けんじんを做なして、藥山やくざんを陥おとしれんことを要えうす。爭い奈なせん藥山やくざんは是れ作家さくけ、一向いつかうに逼ひつし將まさち去さる。山曰く、侍者じしや這この死漢しかんを拖ひき出いせと。陳ちんを展ひらべて向前かうぜんするが如ごとくに相似おほにたり。其その僧便そうすなち走はしる、也なた好よし是ぜは則すなちは是ぜ、爭い奈なせん脫灑だつしゃならず、脚あしに粘ねんし手に粘ねんするを。所以ゆゑに藥山やくざん曰く、泥團でいたんを弄ろうするの漢かん、什麼なんの限かぎりか有あらんと。藥山やくざん當時たうじ若ごとし後語こうご無なくんば、千古せんこの下人もとひとの檢點けんてん

〔因〕本來
は船を索
り、音な
りに物事
に始めて
氣付きて
發する聲
を云ふ。

に遭はん。山曰く、箭を看よ。この僧便ち倒る。且く道へ、是れ會
か是れ不會か。若し是れ會と道は、藥山什麼に因つてか、却つて
恁麼に道ふ、泥團を弄するの漢と。這箇最も惡なり、正に僧の徳山
に問ふに似たり。學人鏢鐙の劍に仗つて、師の頭を取らんと擬する
時如何。山頸を引いて近前して曰く、因。僧曰く、師の頭落ちぬ。
徳山低頭して方丈に歸る。又巖頭僧に問ふ、什麼の處より來る。僧
曰く、西京より來る。巖頭曰く、黄巢過ぎて後、曾て劍を收得する
や。僧曰く、收得す。巖頭頸を引いて、近前して曰く、因。僧曰く、
師の頭落ちぬ。巖頭呵々大笑す。這般の公案、都て是れ陷虎の機、
正に此れに類す。恰かも是れ藥山、他を管せず、只だ識得破するが
爲めに、只管に逼し將ち去る。雪竇曰く、這の僧三步には活すと雖
ども、五歩には須らく死すべし。這の僧甚だ箭を着くることを解し

て、便ち身を放つて倒ると雖ども、山曰く、侍者這の死漢を拖き出
せと。僧便ち走る。雪竇道く、只だ恐らくは三步の外活せざらん
ことを。當時若し五歩の外に跳出せば、天下の人便ち他を奈何とも
せず。作家の相見、須らく是れ賓主始終互換、間斷有ること無うし
て、方に自由自在の分有るべし。這の僧當時、既に始終すること能
はず、所以に雪竇の檢點に遭ふ、後面に亦自ら他の語を用ひて頌し
て曰く、

頌。塵中塵、高着着眼。君看取、何似生。第二頭走。
塵。下一箭、中也。須知。走三步。活鱗々地。只得。五步。
若活、作什麼。跳百步。忽有。成群趁虎。他倒退始得。天
下衲僧放他出頭。正眼從來、付獵人。爭奈藥山未肯
也。只在草窠裏。

則故是、雪竇又作麼生。也不干藥山事、也不干雪竇事、也不干山僧事、也不干上座事。日、看箭。一狀領過也。須與他倒退始得。打日、已塞却汝咽喉了也。

〔何似生〕
何に似て居るかとの意也。

【讀方】塵中の塵、高く眼を着けて看よ。頭を撃け角を戴きて去れり。君看取せよ。何似生。第二頭に走る。射んと要せば便ち射よ。見て什麼か作さん。一箭を下す、中れり。須らく知るべし、藥山好手なることを。走ること三步。(活鱸々地。只だ三步を得たり。死了すること多時。)五歩若し活せば、(什麼をか作す。跳ること百歩。忽ち箇の死中に、活を得ること有らん時如何。)群を成して虎を趁はん。(二り俱に並べ照さん。須らく他の與めに倒退して、始めて得べし。天下の衲僧、他に出頭を放す。也た只だ草窠裏に在り。)正眼從來、獵人に付す。(爭奈せん藥山未だ肯て這の話を承當せざることを。藥

〔二〕
過の同罪狀
ものば、
別々の紙、
す、認
に之れ、
連れて、
めるこ
と認

山は則ち故らに是、雪竇又作麼生。也た藥山の事に干からず、也た雪竇の事に干からず、也た山僧の事に干からず、也た上座の事に干からず。(雲竇高聲に曰く、箭を看よ。一狀に領過す。也た須らく他の與めに、倒退して始めて得べし。打して曰く、已に汝が咽喉を塞却し了れり。)

【譯】塵中の塵、君看取せよと、衲僧家須らく是れ塵中の塵底の眼を具し、塵中の塵底の頭角有り、機關有り、作略有るべし。任ひ是れ翼を挿む猛虎、角を戴く大蟲も、也た只だ身を全うし害を遠けんことを得ん。這の僧當時、身を放つて便ち倒れて、自ら道ふ、我れ是れ塵と。一箭を下す、走ること三步。山曰く、箭を看よ。僧便ち倒る。山曰く、侍者這の死漢を拖き出せ。這の僧便ち走る、也た甚だ好し、奈何せん只だ三步を走り得ることを、五歩に若し活せば、群

を成して虎を趁はん。雪竇道く、只だ恐らくは五歩には須らく死すべし、當時若し五歩の外に跳得出して活せん時、便ち能く群を成し去つて虎を趁はんと。其の塵中の塵、角の利なること鎗の如し、虎も見て亦之れを畏れて走る。塵は鹿中の王たり、常に群鹿を引いて、虎を趁うて別山に入らしむ。雪竇後面に、藥山の亦當機出身の處有ることを頌す、正眼從來、獵人に付すと。藥山射を能くする獵人の如し、其の僧塵の如し。雪竇是の時因みに上堂、此の語を擧して、束ねて一團の話と爲して、高聲に一句を道うて曰く、箭を看よと、坐者立者、一時に起つことを得ず。

第八十二則 大龍色身

垂示曰。竿頭絲線、具眼方知。格外之機、作家方辨。且道、

〔作家〕作者の詩文より出でたる雄偉なる人なることを云ふ。

作麼生是竿頭絲線。格外之機。試舉看。

〔讀方〕垂示に曰く。竿頭の絲線、具眼方に知る。格外の機、作家方に辨す。且く道へ、作麼生か是れ竿頭の絲線、格外の機。試みに舉す看よ。

舉。僧問。大龍色身敗壞、如何是堅固法身。

分作二兩。龍曰。山花開似錦、澗水湛如藍。無孔、

撞着。麤柏板、却往許州去。

〔大龍〕鼎州大龍山の智洪禪師とて、白兆志圓の法嗣達磨の法下十

〔讀方〕擧す。僧大龍に問ふ、色身敗壞、如何なるか是れ堅固法身。

（話兩極と作る。分開するも也た好し。）龍曰く、山花開いて錦に似たり、澗水湛へて藍の如し。（無孔の笛子、麤柏板に撞着す。渾崙擊けども破れず。人は陳州より來りて、却て許州に往き去る。）

四世の宗師なり。色身肉體のこと。古人首山のこと。

〔是故道〕洛浦元安の語なり。洛浦は夾山善

碧巖錄 第九卷

七三

【評】此の事若し言語上に向つて覺めば、一へに棒を掉つて月を打つが如し、且得すらくは没交涉。古人分明に道ふ、親切を得んと欲せば、問を將ち來つて問ふこと莫れ、何が故ぞ、問は答處に在り、答は問處に在りと。この僧一擔の莽鹵を擔うて、一擔の鶻突に換へ、箇の問端を致す、敗缺少なからず、若し是れ大龍にあらずんば、争でか蓋天蓋地なることを得ん。他恁麼に問ふ、大龍恁麼に答ふ、一合相にして、更に一絲毫頭をも移易せず、一へに兔を見て鷹を放ち、孔を見て楔を着くるに似たり。三乘十二分教、還つて這箇の時節有りや、也た妨けず奇特なることを。只だ是れ言語無味にして、人口を杜塞す。是の故に道ふ、一片の白雲、谷口に横へ、幾多の歸鳥、夜巢に迷ふと。有る者は道ふ、只だ是れ口に信せて答へ將ち去ると、若し恁麼に會せば、盡く是れ胡種族を滅する漢ならん。殊に

會の法嗣

〔答處恰好〕問處に恰好の意にて問ひにヒタリと合ふこと。〔也既に〕云々の行處

第八十二則 大龍色身

七三

知らず。古人一機一境、枷を敲き鎖を打ち、一句一言、渾金璞玉なることを。若し是れ衲僧の眼腦ならば、有る時は把住し、有る時は放行す。照用同時、人境俱に奪ひ、雙放雙收、時に臨んで通變す。若し大用大機無くんば、争でか恁麼に天を籠め地を罩むることを解せん、大いに明鏡の臺に當つて、胡來れば胡現じ、漢來れば漢現するに似たり。此の公案は、花藥欄の話と一般なり、然も意却つて同じからず、この僧の問處明らかならず、大龍の答處恰好なり。見ずや僧雲門に問ふ、樹凋み葉落つる時如何。門曰く、體露金風。之れを箭鋒相拄ふと謂ふ。この僧大龍に問ふ、色身敗壞、如何んか是れ堅固法身、大龍曰く、山花開いて錦に似、澗水湛へて藍の如しと。一へに君は西秦に向ひ、我は東魯に之くと云ふが如し。他既に恁麼に行く、我れは却つて不恁麼に行く、他の雲門と、一倍相返く。那

なり。我却て云々。日之行處。古來之。龍僧と見。なるは誤り。天桂師は云へり。

碧巖錄 第九卷

七

筒は恁麼に行く、却つて見易し、這筒は却つて不恁麼に行く、却つて見難し。大龍妨げず、三寸甚だ密なることを、雪竇の頌に曰く、頌。問曾不知、東西不辨、弄物不答、還不會。南不獨。江。月冷風高、何似生。今日正當這時節。天下古巖寒檜。不雨時更好。無孔。堪笑路逢達道人。是親到這裏始得還我拄杖。不將語默對。向什麼處見他好。子來成隊。恁麼來。不將語默對。向什麼處見他好。手把白玉鞭。一折了也。驪珠盡擊碎。留與後人。不擊碎。放恁麼去。增瑕類。見郎當過彌天。國有憲章。識法者懼。朝打八百。三千條罪。只道得一半在。八萬得一半在。未還。

俗に合點の行かぬ。風高し。不會の境。界を云。陵を贊。し語を曰。く風山。の風長。と水蓋。意同し。堪へたり。云々。巖師の志閑。

第八十二則 大龍色身

七五

問曾て知らず、(東西辨せず。物を弄して名を知らず。帽を買ふに頭を相す。答還た會せず。南北分たず。羈體を換却す。江南江北。月冷かに風高し、何似生。今日正當這の時節。天下の人、眼有つて曾て見ず、耳有つて嘗て聞かず。古巖寒檜。雨ふらざる時も更らに好し。無孔の笛子、氈柏板に撞着す。笑ふに堪へたり、路に達達の人に逢うて、(也た須く是れ親しく這裏に到つて、始めて得べし。我れに拄杖子を還し來れ。群を成し隊を作して、恁麼に來る。)語黙を將ちて對せざることを。(什麼の處に向つてか大龍を見ん。筒の什麼を將てか、他に對して好からん。)手に白玉の鞭を把つて、(一より七に至るまで、拗折し了れり。驪珠盡く擊碎す。(後人に留與じて看しむ。可惜許。擊碎せず。(一着を放過す。又恁麼にし去る。)瑕類を増さん。(泥團を弄して、什麼か作さん。轉た見る郎當たるこ

の頌の中
にある語
なり。

〔傍警〕流
視なり、
チラリと
見ると、
と、又曰
く、傍邊
其の事を
明すを云
ふ。

碧巖錄 第九卷

七六

とを。過犯彌天。國に憲章有り、(法を識る者は懼る。朝打三千、暮打八百。)三千條の罪。(只だ一半を道ひ得ること有り。八萬四千無量劫來、無間の業に墮すとも、也た未だ一半を還し得ざることに在らん) 【評】 雪竇頌し得て、最も工夫有り。前來雲門の話を頌するに、却つて曰く、問既に宗有り、答亦同じき攸なり。這箇は即ち不恁麼、却つて曰く、問會て知らず、答還た會せず。大龍の答處傍警にして、直に是れ奇特なり、分明に是れ誰れか恁麼に問ふ、未だ問はざる已前に、早く敗缺を納れ了れり。他の答處、俯して能く恰好なり、機宜に應じて道ふ、山花開いて錦に似、滴水湛へて藍の如しと。汝諸人、如今作麼生か、大龍の意を會す、答處傍警にして、直に是れ奇特なり。所以に雪竇頌出して、人をして知らしめ月冷かに風高し、更に古巖寒檜に撞着すと道ふ。且く道へ、他の意作麼生か會せん。所以に

適來道ふ、無孔の笛子、氈柏板に撞着すと。只だ這の四句頌し了れり。雪竇又人の道理を作さんことを怕れて、却つて曰く、笑ふに堪へたり、路に達道の人に逢うて、語黙を將ちて對せざることを。此の事、且らく是れ見聞覺知にあらず、亦思量分別にあらず。所以に曰ふ、的々兼帶無し、獨運何ぞ依頼せん、路に達道の人に逢うて、語黙を將ちて對せずと。此れは是れ香巖の頌なり、雪竇引き用ふ。見ずや僧趙州に問ふ、語黙を將ちて對せず、未審し什麼を將ちてか對せん。州曰く、漆器を呈すと。這箇は便ち適來の話に同じ、汝が情塵意想に落ちず、一へに什麼にか似たる。手に白玉の鞭を把つて、驪珠盡く擊碎す、是の故に祖令當行、十方坐斷。此れは是れ劒双上の事なり、須く是れ恁麼の作略有る可し。若し不恁麼ならば、總に從上の諸聖に辜負せん。這裡に到つて、要す些子の事無うして、

第八十二則 大龍色身

七七

に入定せしに依て、其遺骨を都に運び、宮中に留むるに、月餘、山に葬らば、しめて大慈勅、雲匡真弘、明禪師と諡號を賜ふ。年七十餘、に依つて、改むるに、色界、

無色界、(四生)胎生、卵生、濕生、化生、(南山北山)同異、の別を絶したる處を云ふ。

し恁麼に會せば、卒に模索不着ならん。有る者は喚んで、無中に唱出すと作す、殊に知らず、宗師家の説話、意識を絶し、情量を絶し、生死を絶し、法塵を絶して、正位に入りて、更に一法を存せず、汝纔かに道理計較を作さば、便ち脚に纏ひ手に纏はん。且く道へ、他の古人の意作麼生。但只心境をして一如ならしめば、好惡是非、他を撼動することを得ず。便ち有と説くも也た得たり、無も也た得たり、有機も也た得、無機も也た得、這裏に到つて、拍々はれ令。五祖先師道く、大小の雲門、元來膽小なり、若し是れ山僧ならば、只だ他に向つて道はん、第八機と。他道ふ、古佛と露柱と相交はる、是れ第幾機ぞ、一時の間、且く目前に向つて包裹す、僧問ふ未審し意旨如何。門曰く、一條の條、三十文に買ふと。他乾坤を定むる底の眼有り、既に人の會する無し。後來自ら代つて曰く、南山に雲を起し、北山

に雨を下すと。且く後學の與めに、箇の入路を通ず。所以に雪竇、只だ他の乾坤を定むる處を拈じて、人をして見しむ、若し纔かも計較を犯して、箇の鋒鋦を露さば、則ち當面に蹉過せん。只だ他の雲門の宗旨を原ねて、他の峻機を明らめんことを要す、所以に頌出して曰く、

頌。南山雲、乾坤莫觀。北山雨、點滴不施。半河北、四七二

三、面相觀。幾處覓不見。帶累新羅國裏、會上堂、

東湧西沒。東行不見西。大唐國裏、未打鼓。遲一刻。還

先行不到。苦中樂、教阿樂中苦。兩重公案、使誰舉。苦便

來。三面誰道黃金、如糞土。具眼者辨。試拂拭看。阿刺刺。

〔四七二〕西天の葉
〔三〕初祖の土
〔一〕初祖の葉
〔二〕初祖の土
〔三〕初祖の葉
〔四〕初祖の土
〔五〕初祖の葉
〔六〕初祖の土
〔七〕初祖の葉
〔八〕初祖の土
〔九〕初祖の葉
〔十〕初祖の土
〔十一〕初祖の葉
〔十二〕初祖の土
〔十三〕初祖の葉
〔十四〕初祖の土
〔十五〕初祖の葉
〔十六〕初祖の土
〔十七〕初祖の葉
〔十八〕初祖の土
〔十九〕初祖の葉
〔二十〕初祖の土
〔二十一〕初祖の葉
〔二十二〕初祖の土
〔二十三〕初祖の葉
〔二十四〕初祖の土
〔二十五〕初祖の葉
〔二十六〕初祖の土
〔二十七〕初祖の葉
〔二十八〕初祖の土
〔二十九〕初祖の葉
〔三十〕初祖の土
〔三十一〕初祖の葉
〔三十二〕初祖の土
〔三十三〕初祖の葉
〔三十四〕初祖の土
〔三十五〕初祖の葉
〔三十六〕初祖の土
〔三十七〕初祖の葉
〔三十八〕初祖の土
〔三十九〕初祖の葉
〔四十〕初祖の土
〔四十一〕初祖の葉
〔四十二〕初祖の土
〔四十三〕初祖の葉
〔四十四〕初祖の土
〔四十五〕初祖の葉
〔四十六〕初祖の土
〔四十七〕初祖の葉
〔四十八〕初祖の土
〔四十九〕初祖の葉
〔五十〕初祖の土
〔五十一〕初祖の葉
〔五十二〕初祖の土
〔五十三〕初祖の葉
〔五十四〕初祖の土
〔五十五〕初祖の葉
〔五十六〕初祖の土
〔五十七〕初祖の葉
〔五十八〕初祖の土
〔五十九〕初祖の葉
〔六十〕初祖の土
〔六十一〕初祖の葉
〔六十二〕初祖の土
〔六十三〕初祖の葉
〔六十四〕初祖の土
〔六十五〕初祖の葉
〔六十六〕初祖の土
〔六十七〕初祖の葉
〔六十八〕初祖の土
〔六十九〕初祖の葉
〔七十〕初祖の土
〔七十一〕初祖の葉
〔七十二〕初祖の土
〔七十三〕初祖の葉
〔七十四〕初祖の土
〔七十五〕初祖の葉
〔七十六〕初祖の土
〔七十七〕初祖の葉
〔七十八〕初祖の土
〔七十九〕初祖の葉
〔八十〕初祖の土
〔八十一〕初祖の葉
〔八十二〕初祖の土
〔八十三〕初祖の葉
〔八十四〕初祖の土
〔八十五〕初祖の葉
〔八十六〕初祖の土
〔八十七〕初祖の葉
〔八十八〕初祖の土
〔八十九〕初祖の葉
〔九十〕初祖の土
〔九十一〕初祖の葉
〔九十二〕初祖の土
〔九十三〕初祖の葉
〔九十四〕初祖の土
〔九十五〕初祖の葉
〔九十六〕初祖の土
〔九十七〕初祖の葉
〔九十八〕初祖の土
〔九十九〕初祖の葉
〔一百〕初祖の土

碧巖録 第九卷

【讀方】 南山の雲、乾坤觀ると莫し。刀斫れども入らず。北山の雨、
（點滴も施さず。半は河南、半は河北。）四七二三、面りに相観る。（幾
處か覓むるに見ざる。傍人を帶累す。露柱燈籠に掛く。）新羅國裏、
曾て上堂、（東湧西没。東行は西行の利を見ず。那裏よりかこの消息
を得來る。）大唐國裏、未だ鼓を打せず。（遅きこと一刻。我れに話頭
を還し來れ。先行到らず、未後ただ過ぎたり。）苦中の樂、（阿誰を
して知らしめん。）樂中の苦、（兩重の公案。誰をしてか舉せしめん。
苦は便ち苦、樂は便ち樂。那裏にか兩頭三面有り來る。）誰れか道ふ
黃金、糞土の如しと。（具眼の者は辨せよ。試みに拂拭して看よ。阿
刺々。可惜許。且らく道へ、是れ古佛か、是れ露柱か。）
【評】 南山の雲、北山の雨、雪竇帽を買ふに頭を相し、風を看て帆
を使ふ。劔刃上に向つて、汝が與めに箇の注脚を下す、直に得たり

〔四七二〕西天の葉
〔三〕初祖の土
〔一〕初祖の葉
〔二〕初祖の土
〔三〕初祖の葉
〔四〕初祖の土
〔五〕初祖の葉
〔六〕初祖の土
〔七〕初祖の葉
〔八〕初祖の土
〔九〕初祖の葉
〔十〕初祖の土
〔十一〕初祖の葉
〔十二〕初祖の土
〔十三〕初祖の葉
〔十四〕初祖の土
〔十五〕初祖の葉
〔十六〕初祖の土
〔十七〕初祖の葉
〔十八〕初祖の土
〔十九〕初祖の葉
〔二十〕初祖の土
〔二十一〕初祖の葉
〔二十二〕初祖の土
〔二十三〕初祖の葉
〔二十四〕初祖の土
〔二十五〕初祖の葉
〔二十六〕初祖の土
〔二十七〕初祖の葉
〔二十八〕初祖の土
〔二十九〕初祖の葉
〔三十〕初祖の土
〔三十一〕初祖の葉
〔三十二〕初祖の土
〔三十三〕初祖の葉
〔三十四〕初祖の土
〔三十五〕初祖の葉
〔三十六〕初祖の土
〔三十七〕初祖の葉
〔三十八〕初祖の土
〔三十九〕初祖の葉
〔四十〕初祖の土
〔四十一〕初祖の葉
〔四十二〕初祖の土
〔四十三〕初祖の葉
〔四十四〕初祖の土
〔四十五〕初祖の葉
〔四十六〕初祖の土
〔四十七〕初祖の葉
〔四十八〕初祖の土
〔四十九〕初祖の葉
〔五十〕初祖の土
〔五十一〕初祖の葉
〔五十二〕初祖の土
〔五十三〕初祖の葉
〔五十四〕初祖の土
〔五十五〕初祖の葉
〔五十六〕初祖の土
〔五十七〕初祖の葉
〔五十八〕初祖の土
〔五十九〕初祖の葉
〔六十〕初祖の土
〔六十一〕初祖の葉
〔六十二〕初祖の土
〔六十三〕初祖の葉
〔六十四〕初祖の土
〔六十五〕初祖の葉
〔六十六〕初祖の土
〔六十七〕初祖の葉
〔六十八〕初祖の土
〔六十九〕初祖の葉
〔七十〕初祖の土
〔七十一〕初祖の葉
〔七十二〕初祖の土
〔七十三〕初祖の葉
〔七十四〕初祖の土
〔七十五〕初祖の葉
〔七十六〕初祖の土
〔七十七〕初祖の葉
〔七十八〕初祖の土
〔七十九〕初祖の葉
〔八十〕初祖の土
〔八十一〕初祖の葉
〔八十二〕初祖の土
〔八十三〕初祖の葉
〔八十四〕初祖の土
〔八十五〕初祖の葉
〔八十六〕初祖の土
〔八十七〕初祖の葉
〔八十八〕初祖の土
〔八十九〕初祖の葉
〔九十〕初祖の土
〔九十一〕初祖の葉
〔九十二〕初祖の土
〔九十三〕初祖の葉
〔九十四〕初祖の土
〔九十五〕初祖の葉
〔九十六〕初祖の土
〔九十七〕初祖の葉
〔九十八〕初祖の土
〔九十九〕初祖の葉
〔一百〕初祖の土

四七二三、面り相観ることを。也た錯つて會すること莫れ、此れ只
だ古佛と露柱と相交はる、是れ第幾機ぞと云ふことを頌し了れり。
後面に路を劈開し、葛藤を打して、他の意を見んことを要す。新羅
國裏、曾て上堂、大唐國裏、未だ鼓を打せず。雪竇、雷轉じ星飛ぶ
處に向つて便ち道ふ、苦中の樂、樂中の苦と。雪竇、七珍八寶を堆
して、這裏に在き了るに似たり。所以に未後に這の一句子有り、曰
く、誰れか道ふ黃金、糞土の如しと、此の一句は、是れ禪月行路難
の詩なり、雪竇引き來つて用ふ。禪月曰く、山高く海深うして、人
測らず、古往今來、轉た青碧、淺近輕浮、與に交はること莫れ、地
卑うして、只だ荆棘を生ずることを解す、誰れか道ふ黃金、糞土の
如しと、張耳陳餘、消息を斷ず、行路難し行路難し、君自ら看よと。
且く土曠く人稀なること莫しや、雪居の羅漢。

第八十三則 雲門古佛交參

第八十四則 維摩不二

別に阿味、
なし。意は
に發する
語と。桂
師は。天
は。と。訓
じて。と。
ツ。物
言ふ。意
取れ。に

〔面前は
云々〕
れ法堂の
中央に立
ちての語

垂示曰。道是是無。可是言。非非無。可非。是非已去。得失
兩忘。淨裸々。赤灑々。且道。面前背後。是箇什麼。或有箇
衲僧。出來道。面前是佛殿。三門。背後是寢堂。方丈。且道。
此人還具眼也。無。若辨得此人。許汝親見古人來。

【評】垂示に曰く。是と道ふも是の是とすべき無く、非と道ふも非
の非とすべき無し。是非已に去つて、得失兩ながら忘す。淨裸々、
赤灑々。且く道へ、面前背後、是れ箇の什麼ぞ。或は箇の衲僧有り
て、出で來つて道はん、面前は是れ佛殿三門、背後は是れ寢堂方丈
と、且く道へ、此の人還つて眼を具するや、也た無しや。若し此の
人を辨得せば、汝に許す親しく古人を見來ることを。

眼にして、
前にの現
成を云う
す。に過ぎ

舉。維摩詰問文殊師利、這漢太煞合關何等是

菩薩入不二法門。知而文殊曰、如我意者。

於一切法、喚什麼作無言無說、

無示無識、瞞別人離諸問答、道什麼是爲入

不二法門。用入作什麼。用什麼於是文殊師利問

維摩詰、我等各自說已、仁者當說、何等是

菩薩入不二法門。這一靠莫道金粟如來。設使三世

還似一人。中箭。雪竇曰、維摩道什麼。咄。萬箭攢心。復

曰、勘破了也。非但當時。即今也。恁麼。雪竇也是。賊過後

雪寶還見得落處。夢也。未夢見。說
什麼勘破。喚。金毛獅子。也。摸索不着。

〔維摩詰〕 譯名。又云。淨
名。稱。毘耶
離國。五百
隨長者。在
居士家。乘
的。居。大。乘
的。真。體。蓋
穿。理。想。蓋
人。物。在。的
人。實。在。的
人。非。在。的
則。此。非。在。的
摩。的。非。在。的

【問】 舉す。維摩詰文殊師利に問ふ、(この漢太煞だ合闍一場の口を合取せよ。)何等か是れ菩薩、入不二の法門。(知つて故らに犯す。)文殊曰く、我が意の如くんば、(什麼と道ふぞ。直に得たり分疎不下なることを。擔枷過狀。髻を把つて衝に投ず。)一切の法に於て、(什麼を喚んでか、一切の法と作す。)無言無説、(什麼と道ふぞ。)無示無識、(別人を瞞することは即ち得たり。)諸の問答を離る、(什麼と道ふぞ。)是れを入不二の法門と爲す。(入ることを用ひて、什麼か作さん。許多の葛藤を用ひて、什麼か作さん。)是に於て文殊師利、維摩詰に問ふ、我等各自に説き已る、仁者當に説くべし、何等か是れ菩薩、入不二の法門。(這の一靠、道ふこと莫れ金粟如來と。設使ひ三世諸

第九卷 第八卷 第九卷 第九卷
法門 品に 出づ。維
摩詰を指
す。この一
靠云々。一
嘉祥大師
維摩經疏
三昧經を
引いて過
文珠龍種
去の佛種
上尊佛金
維摩來と
粟如來と
て佛共に
古佛なり
然れども

佛も、也た口を開くことを得ず。倒に鎗頭を轉じ來れり。一人を刺殺す。箭に中ることは、遠つて人を射る時に似たり。)雪寶曰く、維摩什麼とか道はん。(咄。萬箭心に攢る。他に替つて道理を説く。)復曰く、勘破了也。(但だ當時のみに非ず、即今も也た恁麼。雪寶也た是れ賊過ぎて後弓を張る。然も衆の爲めに力を竭すと雖ども、争何せん。禍私門に出づることを。且く道へ、雪寶還つて落處を見得するや。夢にも未だ夢見ず、什麼の勘破とか説かん。喚。金毛の獅子、也た摸索不着。)

【譯】 維摩詰、諸大菩薩をして、各々不二の法門を説かしむ。時に三十二の菩薩、皆二見の有爲無爲、眞俗二諦を以て、合して一見と爲して、不二の法門と爲す。後に文殊に問ふ、文殊曰く、我が意の如くんば、一切の法に於て、無言無説、無示無識、諸の問答を離

本據明ら
かならず
かたはら
靠は倚靠
と續くと
懸る依り
なる意味
も、熟字
れば推し
倒す義は
り、今は
後者を是
とす。果
〔攢る〕
る也。果
〔蹤跡を
餘す〕
本に除く
跡を作ら
しに不可
なり。蓋

〔據坐〕一
寸坐り直
すこと。古
佛思惟
三昧經に
維摩來の
粟如來の
後來の故
身なりと
あるが云
へり。

碧巖錄 第九卷

る、是れを入不二の法門と爲す。蓋し三十二人は、言を以て言を遣り、文殊は無言を以て言を遣るが如し。一時に掃蕩して、總に要せず、是れを入不二の法門と爲す。殊に知らず、靈龜尾を曳き、迹を拂へば痕を成すことを。又掃帚の塵を掃ふが如くに相似たり、塵去ると雖ども、帚迹猶ほ存す、末後依前として蹤跡を餘す。是に於て文殊却つて維摩に問うて曰く、我等各自に説き已る、仁者當に自ら説くべし、何等か是れ菩薩、入不二の法門。維摩詰默然たり。若し是れ活漢ならば、終に死水裏に去つて浸却せず、若し恁麼の見解を作さば、狂狗の塊を逐ふに似ん。雪竇亦良久と説かず、亦默然據坐と説かず、只だ急々の處に去つて曰く、維摩什麼とか道ひしと。只だ雪竇恁麼に道ふが如きんば、還つて維摩を見るや、也た未だ夢にだも夢見ざること存らん。維摩は乃ち過去の古佛なり、亦眷屬有

りて佛の宣化を助く。不可思議の辯才を具し、不可思議の境界有り、不可思議の神通妙用有り、方丈の室中に於いて、三萬二千の獅子の寶座を容れて、八萬の大衆に與ふるに、亦寛狭ならず。且く道へ、是れ什麼の道理ぞ、喚んで神通妙用と作し得てんや。且く踏つて會すること莫れ。若し是れ不二法門ならば、同得同證して、方に乃ち相共に證知すと雖ども、獨り文殊のみ有りて、與めに酬對するに可なり。然も恁麼なりと雖ども、還つて雪竇の檢責を免れ得んや。也た無しや。雪竇恁麼に道ふ、也た這の二人と相見せんことを要す、曰く、維摩什麼とか道ひし、又曰く、勘破了也と。汝且らく道へ、是れ什麼の處か是れ勘破の處。只だ這の些子、得失に拘はらず、是非に落ちず、萬仞懸崖の如し。向上に性命を捨て得て、跳得過し去らば、汝に許す親しく維摩を見ることを。如し捨不得ならば、大い

第八十四則 維摩不二

〔故然〕此
の二字福
本にはな
しと云ふ

碧巖錄 第九卷

七四〇

に羝羊の藩に觸るゝに似ん。雪竇故然として、是れ性命を捨得する
底の人。所以に頌出して曰く、

頌。咄這維摩老、百。咄他作什麼。朝打三千、暮打八悲生
空懊惱。悲他作什麼。自有金剛王寶劍。臥疾毘耶離、

因誰致得。帶全身太枯槁。病則且置、爲什麼、口似匾擔。
累一切人。七佛祖師來、客來須看、賊來須打。成群一室且頻

掃。猶有這箇在。元來請問不二門。若有可說、被他說
在。鬼窟裏作活計。請問不二門。了也。打曰、和闍黎
也尋。當時便靠倒。着天々々。不靠倒、死中得活。猶

金毛獅子、無處討。咄。還見麼。
讀方 咄這の維摩老、(他を咄して什麼か作さん。朝打三千、暮打八

〔七佛〕毘
婆尸佛、
尸棄佛、
毘沙浮
佛、拘留
孫佛、拘
那含牟尼
佛、迦葉
佛、釋迦
牟尼佛。

百。咄し得るも事を濟さず。好し三十棒を與ふるに。(生を悲しんで
空しく懊惱す。(他を悲しんで什麼か作さん。自ら金剛王寶劍有り。
他の閑事の爲めに、無明を長ず。勞して功無し。)疾に毘耶離に臥す、
(誰れに因つてか致し得たる。一切の人を帶累す。)全身ただ枯槁す。
(病むことは則ち且く置く、什麼としてか口匾擔に似たる。飯も也た
喫することを得ず、喘ぐことも也た喘ぐを得ず。)七佛祖師來る、(客來
らば須く看るべし、賊來らば須く打すべし。群を成し隊を作す。
也た須く是れ作家にして、始めて得べし。)一室且つ頻りに掃ふ。
(猶ほ這箇の在る有り。元來鬼窟裏に在りて活計を作す。)不二門を
請問す、(若し説くべき有りとも、他に説き了らる。打して曰く、闍
黎に和して、也た尋ぬれども見ず。)當時便ち靠倒す。(着天々々。什
麼と道ふぞ。)靠倒せず、(死中に活を得たり、猶ほ氣息の在る有り。)

第八十四則 維摩不二

七四一

〔譬へば圓覺經に云ふが如き〕
圓覺經に云々とあ

金毛の獅子、討ぬるに處無し。(咄。還つて見るや。蒼天々々。)
【評】雪竇道く、咄這の維摩老と、頭上に先づ一咄を下して、什麼をか作す。金剛王寶劍を以て、當頭に直截す、須く朝打三千、暮打八百して、始めて得べし。梵語には維摩詰と云ふ、此には無垢稱と云ひ、亦淨名と云ふ、乃ち過去の金粟如來なり。見すや僧雲居の簡和尚に問ふ、既に是れ金粟如來、什麼としてか、却つて釋迦如來の會中に於て聽法する。簡曰く、他人我を争はずと。大解脱の人、成佛不成佛に拘はらず、若し他修行して、務めて佛道を成すと道はば、轉た没交渉。譬へば圓覺經に云ふが如き、輪廻の心を以て、輪廻の眼を生じて、如來の大寂滅海に入らんとせば、終に至ること能はずと。永嘉曰く、或は是或は非、人識らず、逆行順行、天も測ること莫しと、若し順行する時は、則ち佛果位中に趣き、若し逆

〔壽禪師〕
永明の延壽禪師なり
の孫嗣

〔唐の時〕
唐の高宗帝の時なり

〔信すべからず〕
永固を信すべからずなり

行する時は、則ち衆生の境界に入る。壽禪師道はく、直饒ひ汝磨鍊して、這の田地に到ることを得るも、亦未だ汝が意に順ず可からざることに在らん、直に無漏の聖身を證せんを待つて、始めて逆行順行すべし。所以に雪竇道く、生を悲しんで空しく懊惱すと。維摩經に曰く、衆生病有るが爲めの故に、我れ亦病有りと。懊惱は則ち悲絶なり。疾に毘耶離に臥すとは、維摩疾を毘耶離城に示す、唐の時王玄策、西域に於て、其の居を過ぐ、遂に手板を以て、縦横其の室を量るに、十笏を得たり、因つて方丈と名く。全身太だ枯槁す、因みに身の疾を以て、廣く爲めに説法して曰く、是の身は無常無強、無力無堅にして、速朽の法なり、信すべからざるなり、苦を爲し惱を爲す、衆病の集まる所、乃至陰界入の、共に合成する所なりと。七佛の祖師來る。文殊は是れ七佛の祖師、世尊の旨を承けて、彼れに

庵主呵々大笑す。僧曰く、この老賊。峰曰く、老僧を争奈何せん。是は則ち是、二り俱に了せず、千古の下、人の點檢に遭ふ。所以に雪竇道はく、是は則ち是、兩箇の惡賊、只だ耳を掩うて鈴を偷むことを解すと。他の二人、皆是れ賊なりと雖ども、機に當つて却つて用ひず、所以に耳を掩うて鈴を偷む。此の二老、百萬の軍陣を排して、却つて只だ掃帚を鬪はしむるが如し。若し此の事を論せば、須く是れ人を殺すに、眼を眨さざる底の手脚なるべし。若し一向に、縦して擒せず、一向に殺して活せずんば、人に怪笑せられんことを免れず。然も此の如くなりと雖ども、他の古人、亦許多の事なし。看よ他の兩箇恁麼なることを、總に是れ機を見て作す。五祖道はく、神通遊戯三昧、慧炬三昧、莊嚴王三昧、自らはれ後人、脚跟地に點ぜず。只去つて古人を點檢して、便ち道ふ、得有り失有りと。有る底

〔落節〕商賣の利を失ふこと、又好機會を逸するに用ふ。

は道ふ、分明に是れ庵主落節すと。且得すらくは没交渉。雪竇道く、他の二人の相見、皆な放過の處ありと。其の僧道ふ、這裏忽大蟲に逢ふ時、又作麼生。峰便ち虎聲を作す、此れは便ち是れ放過の處なり、乃至道ふ、老僧を争奈何せんと、此れ亦是れ放過の處なり、着々第二機に落在す。雪竇道く、用ひんと要せば便ち用ふ。如今の人、恁麼に道ふことを聞いて、便ち道ふ、當時好し與めに令を行するに、且く盲枷瞎棒すること莫れ。只徳山門に入れば便ち棒し、臨濟門に入れば便ち喝するが如き、且く道へ、古人の意如何。雪竇後面に、便ち只だ此の如く頌出す。且く道へ、畢竟作麼生か耳を掩うて鈴を偷むことを免れ得去らん。

頌。見之不取。是過千里。思之千里。悔不當初。若天蒼天。

好箇斑々争奈未解用去。爪牙未備只恐用處不明。
 道。君不見大雄山下、忽相逢有條攀條、落落
 聲光、皆振地這大蟲却恁麼去。猶較。大丈夫見也
 無老婆心切。若解開眼、同收虎尾兮捋虎鬚忽然突
 收生同死。雪竇打葛藤。放汝三十棒。教汝轉身吐氣。喝。打曰。何不道這老賊。

〔大雄山〕

讀方 之れを見て取らざれば、(蹉過了れり。已に是れ千里萬里) 之れを思ふこと千里。(悔ゆるくは當初を慎しまざることを。蒼天蒼天) 好箇の斑々、(闍黎自領出去。争奈せん未だ用ふることを解せざることたるを。) 爪牙未だ備はらず。(只だ恐らくは用處明らかならざらん)とを。爪牙の備はらんを待つて、汝に向つて道はん。君見すや大

下忽相逢
 黄麋の相
 見なり
 評唱にあ
 大の貌。廣

〔虎頭を
 收め云
 云〕瀧山
 仰山の相
 見問答を
 引く評
 唱にあり

〔後語〕別

雄山下、忽ち相逢ふ、(條有れば條を攀ぢ、條無ければ例を攀づ。) 落
 落たる聲光、皆地を振ふ。(這の大蟲却つて恁麼に去る。猶ほ些子に
 較れり。幾箇の男兒か是れ丈夫。) 大丈夫見るや也た無しや、(老婆心
 切。若し眼を開くことを解せば、同生同死せん。雪竇葛藤を打す。) 虎
 尾を收め虎鬚を捋つ。(忽然として突出せば、如何か收めん。天下
 の衲僧を收めて、這裏に在り。忽ち箇の出で來ること有らば、便ち一
 拶を與へん。若し收むること無くんば、汝に放す三十棒。汝をして身
 を轉じて氣を吐かしむ。喝。打して曰く、何ぞ這の老賊と道はざる。)
 【評】 之れを見て取らざれば之れを思ふこと千里、正に嶮處に當つ
 て、都て使ふこと能はず、他の老僧を争奈何せん道はんを等つて、
 好し自分の草料を與ふるに。當時若し這の手脚を下し得ば、他必ず
 須らく後語有るべし。一人只放つとを解して、收むることを解せず、

の手段と云ふこと

碧巖錄 第九卷

七五四

これを見て取らず、早く是れ白雲萬里、更に什麼の之れを思ふことと千里とか説かん。好箇斑々、瓜牙未だ備はらず、是は則ち是、箇の大蟲、也た牙を藏し爪を伏することを解す、争奈せん人を咬むことを解せざることを。君見ずや大雄山下、忽相逢ふ、落々たる聲光、皆地を振ふ。百丈一日黄蘗に問うて曰く、什麼の處より來る。蘗曰く、山下に菌子を採り來る。丈曰く、還つて大蟲を見るや。蘗便ち虎聲を作す。丈腰下に於て、斧を取つて斫る勢を作す。蘗約住して便ち掌す。丈晚に至つて上堂に曰く、大雄山下に一の虎有り、汝等諸人出入切に須く好看すべし、老僧今日、親しく一口に遭ふと。後來瀉山、仰山に問ふ、黄蘗の虎話作麼生。仰曰く、和尚尊意如何。瀉山曰く、百丈當時合に一斧に斫殺すべし、什麼に因つてか此の如くなるに到る。仰山曰く、然らず、瀉山曰く、子又た作麼生か、仰曰

く、唯だ虎頭に騎るのみにあらず、亦た虎尾を收むることを解す、瀉山曰く、寂子甚だ嶮崖の句有りと。雲寶引き用ひて、前面の公案を明かす、聲光落々として、大地に振ふ、這箇の些子、轉變自在にして、句中に出身の路有らんことを要す。大丈夫見るや也た無しや、還つて見るや、虎尾を收め虎鬚を持つ、也た須く是れ本分なるべし。任ひ汝虎尾を收め虎鬚を持つるも、未だ免れず、一時に鼻孔を穿却することを。

第八十六則 雲門厨庫三門

垂示曰。把定世界、不漏絲毫。截斷衆流、不存涓滴。開口便錯、擬議即差。且道、作麼生是透關底之眼。試道看。

讀方 垂示に曰く。世界を把定して、絲毫を漏らさず、衆流を截斷し

(絲毫、絹)

第八十六則 雲門厨庫三門

七五五

滴語は異れども、意は同じく、密少の細末と。

碧殿録 第九卷

七五

て、涓滴を存せず。口を開けば便ち錯り、擬議すれば即ち差ふ。且らく道へ、作麼生か是れ透關底の眼。試みに道へ看ん。

擧。雲門垂語曰、人々盡有光明在桶、黑漆看時

不見暗昏々看時作麼生是諸人光明山是山、水是水。

漆桶裏洗黑汁。自代曰、厨庫三門老婆心切。打。又曰、好

事不如無自知較一半。猶較些子。

〔光明〕本來具有大光明なり

【讀方】擧す。雲門垂語して曰く、人々盡く光明の在る有り、(黒漆桶)看る時は見え、暗昏々(看る時瞎す)作麼生か是れ諸人の光明(山は是れ山、水は是れ水。漆桶裏は黒汁を洗ふ)自ら代つて曰く、厨庫三門(老婆心切。葛藤を打して什麼か作さん)又曰く、好

〔香林〕澄遠禪師の法嗣なり。

事も無きには如かず。(自ら知る一半に較ることを。猶ほ些子に較れり。)

【評】雲門室中に、垂語して人を接す、汝等諸人、脚跟下に各々一段の光明有り、今古に輝騰して、適かに見知を絶す。然かも光明なりと雖ども、恰かも問着するに到つて、又會せず、豈に是れ暗昏々地なるにあらずや。二十年垂示するに、都て人の他の意を會する無し。香林後來代語を請ふ。門曰く、厨庫三門。又曰く、好事も無きに如かずと。尋常代語は只だ一句、什麼としてか、這裏却つて兩句なる。前頭の一句、汝が爲めに略ほ一線路を開いて、汝をして見せしむ。若し是れ箇の漢ならば、聊か擧着するを聞いて、剔起して便ち行かん。他、人の此に滞在せんことを怕れて、又曰く、好事も無きには如かずと。依前として汝が與めに掃却す。如今の人、纔かに

第八十六則 雲門厨庫三門

七五

〔所以に
道ふ心華
云々〕圓

光明を舉着するを聞いて、便ち去つて瞠眼して曰く、那邊は是れ
厨庫、那裏は是れ三門と。且得すらくは没交涉。所以に道ふ、鈎頭の
意を識取せよ、定盤星を認むること莫れと。此の事根上に在らず、
亦境上に在らず、須く是れ知見を絶し、得失を忘じ、淨裸々赤灑
灑として、各々當人分上に、究取して始めて得べし。雲門曰く、日
裏に來往し、日裏に人を辨ず、忽然として半夜、日月燈光無きに、
會て到る處は、則ち故らに是、未だ會て到らざる處に、一件の物を
取らんに、還つて取り得てんや。參同契に曰く、明中に當つて暗有
り、暗相を以て視ること勿れ、暗中に當つて明有り、明相を以て遇
ふと勿れと。若し明暗を坐斷せば、且く道へ、是れ箇の什麼ぞ。
所以に道ふ、心花發明して、十方刹を照すと。盤山曰く、光、境
を照すに非ず、境亦存するに非ず、光境俱に忘す、復是れ何物ぞ。

覺經の文
なり。又曰く
此の見る
聞云々
三平義忠
の語なり
〔古人道〕
維摩經の
文。〔古人道〕
龍樹の語
なり。

又曰く、此の見聞に即して見聞に非ず、餘の聲色の君に呈すべき
無し、箇の中若し了せば、全く無事。體用何ぞ妨げん、分不分と。
但だ末後の一句を會取し了つて、却つて前頭に去つて遊戯せば、畢
竟して裏頭に在つて、活計を作さず。古人道はく、無住の本を以て、
一切の法を立すと。這裏に去つて、光影を弄し、精魂を弄すること
を得ざれ。又無事の會を作すことを得ざれ。古人道はく、寧ろ有の見
を起すこと、須彌山の如くなるべくとも、無の見を起すこと、芥子
許の如くもす可からず。二乗の人、多く偏へに此の見に墜つ、雪竇
の頌に曰く、

頌。自照列孤明、森羅萬象。賓主交參。裂爲君通。一
線。何止一線。十日並。花謝樹無影、打葛藤。有什麼了。
照。放一線。道即得。花謝樹無影、期向什麼處摸索。

合くして見
云々合し
に合し
て、乃至
明に合し
てと讀む
義あり。

を頷す。見ある合くして又見ず、明なる合くして又明ならず。倒ま
に牛に騎つて佛殿に入る、黒漆桶裏に入り去る、須く是れ汝自ら牛
に騎つて、佛殿に入つて、是れ箇の什麼の道理ぞと道ふを見るべし。

第八十七則 雲門藥病

垂示曰。明眼漢沒窠臼。有時孤峰頂上、草漫々、有時鬧
市裏頭、赤灑々。忽若忿怒那吒、現三頭六臂、忽若日月
面、放普攝慈光。於一塵、現一切身、爲隨類人、和泥合
水。忽若撥着向上竅。佛眼也覷不着、設使千聖出頭來、
也須倒退三千里。還有同得同證者麼。試舉看。

〔那吒〕阿

〔讀方〕 垂示に曰く。明眼の漢、窠臼に没し、有る時は孤峰頂上に、
草漫々、有る時は鬧市裏頭に、赤灑々、忽若し忿怒の那吒、三頭

修羅の一
種に、し
て禿頂と
云ふと。
〔竅〕穴な
り。
〔撥着〕開
くこと

〔擺向〕拂
ひのける
こと

〔壁立千

六臂を現じ、忽ち若し日月月面、普攝の慈光を放ち、一塵に於て、
一切身を現じ、隨類人となつて、和泥合水。忽若し向上の竅を撥着せ
ば、佛眼も也た覷不着、設使ひ千聖出頭し來るも、也た須らく倒
退三千里なるべし。還つて同得同證の者有りや、試みに舉す看よ。

舉。雲門示衆曰。藥病相治、不可得。盡大地是

藥。苦瓠連根苦。那箇是自己。甜瓜徹蒂甜。那

〔讀方〕 舉す。雲門衆に示して曰く、藥病相治す、(一合相不可得)盡
大地是れ藥、(苦瓠は根に連つて苦し。一邊に擺向す)那箇か是れ自
己。(甜瓜は蒂に徹して甜し。那裏よりか這の消息を得來る。)

〔評〕 雲門道はく、藥病相治す、盡大地是れ藥、那箇か是れ自己と、
諸人還つて出身の處有りや。二六時中、壁立千仞なることを管取せ

〔回願〕他
の本には
祝願に作
る。

〔金鶴〕
山開先
善暹禪師

碧巖錄 第九卷

七四

よ。徳山の棒雨點の如く、臨濟の喝雷奔に似ることは、則ち且く致く、釋迦は自ら釋迦、彌勒は自ら彌勒、未だ落處を知らざる者は、往々に喚んで藥病相投する會を作し去る。世尊四十九年、三百餘會、機に應じて教を説く、皆是れ病に應じて藥を與ふ、蜜果を將つて、苦葫蘆に換ふるが如くに相似たり。既に汝諸人の業根を洵して、灑々落落たらしむ。盡大地是れ藥、汝什麼の處に向つてか膏を挿む、若し膏を挿み得ば、汝に許す身を轉じて氣を吐く處有りて、便ち親しく雲門を見ることを。汝若し回願躊躇せば、膏を挿むことを得ざることを管取せよ。雲門汝が脚跟底に在つて、藥病相治す、也た只だ是れ尋常の語論。汝若し有に着すれば、汝が與めに無と説き、汝若し無に着すれば、汝が與めに有と説く、汝若し不有不無に着すれば、汝が與めに糞掃堆上に去つて、丈六の金身を現じ、頭出頭没す。只だ

如今、盡大地森羅萬象、乃至自己、一時に是れ藥、恁麼の時に當つて、却つて那箇を喚んでか是れ自己とせん。汝一向に喚んで藥と作さば、彌勒佛下生にも、也た未だ夢にだも雲門を見ざることを在らん、畢竟如何。鈞頭の意を識取せよ、定盤星を認むること莫れ。文殊一日、善財をして、去つて藥を探らしむ、曰く、是れ藥ならざる者を採り將ち來れ。善財徧く採るに、是れ藥ならざるもの無し、却り來つて白して曰く、是れ藥ならざる者無し。文殊曰く、是れ藥なる者を探り將ち來れ。善財乃ち一花草を拈じて、文殊に度與す。文殊提起して衆に示して曰く、此の藥亦能く人を殺し、亦能く人を活すと。此の藥病相治の話、最も看難し、雲門室中、尋常用ひて人を接す。金鵝長老、一日雪竇を訪ふ、他は是れ箇の作家、乃ち臨濟下の尊宿、雪竇と此の藥病相治の話を論ず、一夜天光に至つて、方に能く善を

第八十七則 雲門藥病

七五

なり、徳山の法
を遠に嗣
惠、即ち嗣
臨濟下し
あらずし
て雲門下
なりと。
〔他の意〕
雪竇の意
なり。

碧巖錄 第九卷

盡す。這裏に到つて、學解思量計較、總に使ふことを着けず。雪竇
後に頌有り、他に送つて道く、藥病相治す、見ること最も難し、萬
重の關鎖、ただ端無し、金鵝道者、來つて相訪ふ、學海の波瀾、一
夜に乾くと。雪竇後面に頌し得て、最も工夫有り。他の意亦竇に在
るか、亦主に在るか、自ら見るべし。頌に曰く、

頌。盡大地是藥、教誰辨的。撒沙。古今何太錯。中

有響。一筆。閉門不造車、大小雪竇爲衆。揚力。禍出私門。
勾下。咄。通途自寥廓。脚下便入草。上馬見路。錯錯錯。
夫。向鬼窟。裏作活計。信手拈來。不妨奇特。錯錯錯。
一雙劍倚空飛。鼻孔遼天。亦穿却。頭落也。打曰、
穿却了也。

讀方 盡大地是藥、(誰れをしてか的を辨せしめん。沙を撒し土を

〔坦蕩と
して佛祖
云中〕佛
位中に拘
はらず全
く修行證
得を守ら
ぬこと

〔大梅〕禪
林類聚に
曰く、大

撒す。高處に架して着けよ。古今何ぞ太だ錯まる、(言中に響有り。
一筆に勾下す。咄。門を閉ちて車を造らず、(大小の雪竇、衆の爲め
に力を竭す。禍は私門より出づ。坦蕩として一絲毫を掛けず。阿誰
か閑工夫有る。鬼窟裏に向つて、活計を作す。途に通すれば自ら寥
廓。(脚下便ち草に入る。馬に上つて路を見る。手に信せて拈じ來る
に、妨けず奇特なることを。錯。錯。(雙劍空に倚つて飛ぶ。一箭に
雙鵬を落す。鼻孔遼天も、亦穿却す。(頭落ちぬ。打して曰く、穿却
し了れり。)

評 盡大地是藥、古今何ぞ太だ錯る。汝若し喚んで藥の會を作
さば、自古自今、一時に錯り了れり。雪竇曰く、有る般の漢は、大
梅の脚跟を截斷することを解せず、只管に道ふ、程を貪ること太だ
速かなりと。他は雲門の脚跟を截斷することを解す、雲門の這の一

〔玄沙參〕
久しく雪
峰に參し
たこと。
〔地藏〕
漢の珪羅
禪師に
て、師に
玄沙の嗣
なり。

碧巖錄 第九卷

死却すること莫れ、須く是れ佗の玄沙の意を會して、始めて得べし。
玄沙常に此の語を以て人を接す。僧有り久しく玄沙の處に在り、一
日上堂、僧問ふ、和尚曰ふ、三種病人の話、還つて學人が道理を説
くことを許さんや、也た無しや。玄沙曰く、許す。僧便ち珍重して
下り去る。沙曰く、不是々々。この僧他の玄沙の意を會得す。後來
法眼曰く、我れ地藏和尚の、この僧の語を擧すること聞いて、方
に三種病人の話を會すと。若しこの僧不會と道はゞ、法眼什麼とし
てか、却つて恁麼に道ふ、若し他會すと道はゞ、玄沙什麼として
か、却つて不是々々と道ふ。一日地藏道はく、某甲聞く、和尚に三種
病人の話有り、是なりや否や。沙曰く、是。藏曰く、珪琛現に眼
耳鼻舌有り、和尚作麼生か接せん。玄沙便ち休し去る。若し玄沙の
意を會得せば、豈言句上に在らんや、他會する底、自然に殊別な

り。後ちに僧有り雲門に舉似す。門便ち他の意を會して曰く、汝禮
拜せよ着、僧禮拜して起つ。門拄杖を以て拄く。この僧退後、門曰
く、汝是れ患旨にあらす。復近前來と喚ぶ、僧近前す。門曰く、汝
是れ患聾にあらす、乃ち曰く、會すや。僧曰く、不會。門曰く、汝
是れ患啞にあらす。其の僧此に於て省有り。當時若し是れ箇の漢な
らば、他の禮拜せよ着と道はんを等つて、便ち與めに禪床を掀倒せ
ば、豈に許多の葛藤有ることを見んや。且く道へ、雲門と玄沙と、
會處是れ同か是れ別か。他の兩人の會處、都べて只だ一般なり。看
よ他の古人出で來つて、千萬種の方便を作すことを、意鈎頭上に在
り、多少か苦口なる、只だ諸人をして、各々此の一段の事を明らめ
しむ。五祖老師曰く、一人は説き得て、却つて不會、一人は却つて
會して、説くことを得ず、二人若し來參せば、如何が他を辨得せん。

第八十八則 玄沙三種病人

